群馬県歴史の道調査報告書第六集

歴史の道調査報告書

清水峠越往還

群馬県教育委員会

清水峠越往還

序

昭和五十年代における本県の社会開発の進展は著しいものがあります。関越自動車道・上武国道・上越新幹線の開通を控え本県の産業経済文化にとって飛躍の年代といえましょう。また、これら交通網の整備に伴う社会生活の変革は県民の生活にも大きな影響を与えてきております。

これら近代化の波は、ふるさとの香りともいうべき郷土の歴史的遺産を急速に滅失させつつあり、バランスのとれた開発が望まれ、保存対策が強く叫ばれるようになってまいりました。

本県では、こうした要請に応じて、昭和五十三年度から国庫補助を得て、四か年計画で歴史の道調査を実施してまいりました。本年度はその第三年次にあたります。これまでの二か年の調査結果については既に報告書で紹介したとおり、多くの成果を挙げることができました。

本年度の調査対象街道は、下仁田道、清水峠越往還、佐渡奉行街道、古戸・桐生道、古河往還の五街道でありますが、下仁田道を除くと比較的短い街道であります。しかし、それらの街道はその地域にとって重要な役割を果たしてきた街道であり、また、それぞれ特色のある道でもあります。

中世の道の面影をとどめる清水峠越往還・佐渡奉行街道、我国のシルクロード及び低湿地帯の街道である古戸・桐生道及び古河往還。また、砥石、こんにゃくの道としての下仁田道等、地域の特色を持っております。

本調査で得られたこれら貴重な成果を、本書で広く県民に紹介して活用していただくとともに、今後における保存対策の資料として参考にしてまいりたいと思います。

なお、末筆ながら、調査の実施と報告書の作成に御協力いただいた調査員の方々や、地元教育委員会並びに協力いただいた地元のみなさまに深く御礼申し上げる次第です。

昭和五十六年三月一日

群馬県教育委員会教育長　横山　巌

目　次

序　群馬県教育委員会教育長　横山　巌

歴史の道調査実施要項

I　清水峠越往還の概観

一、道のはじまり……3
二、清　水　道……4
三、越後の上杉氏……5
四、口　留　番　所……5
五、清水道の開削……6
六、清水越新道の完成……6
七、つけ加えて……7

II　道の確定

一、道の確定……8
二、沿線地図……13

III　清水峠越往還の現状と文化財

一、沼田城下から真庭政所集落へ……18
二、真庭政所集落から後閑集落へ……26
三、後閑集落から川上集落へ……31
四、川上集落から清水峠へ……36

あとがき……42

歴史の道調査実施要項

一、目　　的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいうべき由緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

二、調　査　主　体　者

群馬県教育委員会

三、調　査　の　方　法

(1) **指　導**

調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

(2) **総　務**

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を総括する。

県教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員。

(3) **調査員**

真　庭　唯　芳　　文化財調査委員

金　子　正　宏　　利根商業高等学校教諭

矢　島　宣　弘　　嬬恋高等学校教諭

近　藤　義　雄　　前橋市立図書館長

青　木　　宏　　伊勢崎東高等学校教諭

茂　木　允　視　　大胡町立滝窪小学校教諭

(4) **調査協力機関**

沼田市教育委員会

月夜野町教育委員会

水上町教育委員会

(5) **調査方法**

○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

(6) **調査対象**

昭和五十五年度は、清水峠越往還及び他街道とする。

（調査事項）

④ 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば―関・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御仮屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道

標・地蔵・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所（社寺・札所・霊場・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）―の分布状況と保存の実態。

㋙　無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

㋚　道・運河の歴史的意義・格・沿革。

㋛　河川の歴史的変遷。

㋜　沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

㋝　江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道、運河ごとに分冊とし作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

Ⅰ　清水峠越往還の概観

一、道のはじまり

古くは上野国と呼ばれた群馬県は、日本のほぼ中央に位置し、郷土の歴史と地理をよみこんだ上毛カルタに「鶴舞う形の群馬県」と詠まれているが、寛文二（一六六二）年に描かれた「上野全国絵図」（明治八年写）を見ると、当時の上野国は、現在の群馬県と形は変わらずほとんど同じである。

国の境界線は山の尾根や谷ぞい或は川などが境をなしていたので、今でも同じ形をしているのであろう。

その群馬県のや、中央を流れる利根川は往古より坂東太郎と呼ばれ、その源流は、県最北端の上越国境に位置する標高一、八三四メートルの大水上山南東の谷から発し、多くの支流を集めて日本一の川となる。

寛文２年　上野全国絵図

その利根川の源流に近い、沼田を中心とする奥村の一帯を利根地方と言い、ここに清水峠越往還がある。

霊亀元（七一五）年、里が郷と改称され、利根四郷が生まれたといわれているが、承平七（九三七）年、京の学者であり歌人として、三十六歌仙の一人であった、源順（みなもとのしたがう）が著わした和名類聚抄に利根郡は上野十四郡の一つに数えられ呉桃（名胡桃、現在月夜野町上津下津）渭田（沼田、のまたとも言った）男信（川場村生品）笠科（片品村）の四郷が記載されていて、利根郡一帯が当時すでに相当発展していた事を示している。

現在の月夜野町は利根川をはさんだ、古馬牧村と桃野村との合併により生れた町であるが、利根川の東の古馬牧村は往時その名が示す如く牧場であった。古墳時代が終る頃には、この地方にも大和農法が伝えられ、農耕と牧畜が次第に発展してきた事だろう。

大宝元（七〇一）年、大宝律令の発布についで既牧令が出て利根の地にも牧場が設けられた。これが「長野牧」と称せられた御牧（勅使牧）で、大日本地名辞書（吉田東伍）に「長野は古の牧の名にして、利根川の源谷をなす如し、即ち呉桃郷（ごとうごう）の北なり」とあり、日本後記に嵯峨天皇の弘仁二（八一一）年九月「三品葛原新王に上野国利根郡長野牧を賜う」とある。古くは牧の郷と言って後、上牧下牧と分かれた。この一帯が牧場であって、官の馬牛の生産をした。軍団用及び駅逓用の馬、農耕用の牛であるが、ここは馬牧のようであった。

この頃上馬は、毎年五～十頭が京へ送られたと言うが、京都迄の駒を率いての旅は大変な大行事であったと思う。この牧場から京都に上る道の沼田迄の通行には、やはり後の清水道の一部を通ったものと思われる。

さらに、月夜野町の県指定史跡「梨木平敷石住居跡」は縄文時代中期のも

ので、板状の石を直径約四メートルの隅の丸い方形に敷きつめた竪穴式の住居跡であって、敷石の配置はみごとな左右対象を示し、ここの住人は相当高度な美的感覚を持っていたと思われる。

この事から考えてこの地方一帯は古い頃から川沿いに集落が発達し人が住み、文化が開けていた事がわかる。当然道も発達したはずである。

さらに、この住居跡の二―三〇〇メートル程北にある深沢遺跡から、やはり縄文中期頃の墓とおもわれる環状列石遺構が発見された。これにともなって深鉢土器、双口注口土器や磨石、石皿、石鏃などが出土したが、その中の一つの、石のヤジリの根部には、天然アスファルトがつけられていた。

この意味するものは、今から約四千年以上前の時代に、すでに新潟地方との間に交易がなされていた事も考えられる。

ヤジリを矢として使う場合は篠竹を使ったと思われるが、その篠の先に石鏃をつけるために、松ヤニやアスファルト等を接着剤として使用したと言う。なんと言っても天然アスファルト石油産出国（新潟や秋田が昔から有名）しかありえないとすれば、新潟との交易があった事になる。したがってそのルートはどこかわからないが、清水峠を越えて来たのかも知れない。いずれにせよ道は、古い頃からそこにあった。

二、清　水　道

清水峠越往還は、町誌「みなかみ」によれば土地の者は、清水の直越と言い清水道、又は清水越え或は清水街道と言う。

古来より道は川の両岸から次第に開けて行った。とくに山間地においては特にその感が深い。いわば川の東通り、西通りである。そして川の東通りから西通りにうつる通路が開拓されたのは（勿論初期の頃は徒渉や渡舟と云う時期もあった事であろうが）架橋の技術も進んできた中世末のことで、沼田が利根の要衝として繁栄し始めてからと思われる。

谷　川　岳

しかし、土地の者が越後（新潟県）へ行かなければならない用件と言うものは、ほとんど普通の生活ではありえない。道は必要から生れるのであるから、産業道路の発達、いわゆる「沼田街道」の開発である。

利根の奥地の藤原から沼田迄約十里余り、健脚な昔の人は日帰りで往復したという。

藤原―夜後―粟沢―綱子―幸知―湯檜曾―大穴―湯原―川上―小仁田―高日向を経て、沼田に至る道で、この道のほとんどが、清水峠越往還と同じ道すじを通る。

なお、越後（新潟県）への道は、この清水道の西方に古くから知られた三国街道がある。とくに江戸時代には、東海道、中山道、日光道、甲州道、奥州道の五街道に次ぐ要路であり大変にぎわった。

この三国街道の他にも関東と越後への道としては、みやま文庫「三国街道」（萩原進氏）に、四万温泉から日向見を通り木根宿を経て、稲包山から、越後の浅貝村に出る道が記されており「加沢記」によると、上杉憲政が浪人して利根郡の知るべを頼って隠れていたが「其後吾妻四万木之根通越後へ退去也ければ」とある。

三、越後の上杉

ここで清水道と言うと、「越後の上杉謙信云々」と言う事になるので、この辺を「三国の歴史」桑原孝著で見ると、関東では北条氏康が勢力を伸して来たので、関東管領上杉憲政は、氏康に関東を追われ、天文二十一（一五五二）年に謙信を頼って越後に逃れてきた、憲政は永禄四（一五六一）年関東管領の職と上杉の名跡を謙信に譲った。これにより謙信は、関東の支配者として、北条氏討伐のために越後の大軍を、三国峠や清水峠を越えて関東に送り込んだ。謙信はこの関東遠征を、天正六（一五七八）年三月二十九才で逝去するまでの間に、十数回も行った。この頃は、戦国の群雄割拠の時代、したがって、謙信は関東だけでなく、これと同時に北信濃では甲斐の武田信玄と、北陸では織田信長の大軍を相手に戦っていた。関東では常時、前橋城が越後の支配下にあった。もちろん謙信は、上洛して天下に号令する日を目指していたのである。

さて謙信が越後の大軍を率いて山越えをして関東に入る道は、三国越えと清水越え、さらに土樽越えがあったと言う。

上杉謙信の越後軍用道路

土樽越えは、三国越えと清水越えの中間にあって、近道であったが急峻な山坂を、真っすぐに上り下りしたので、鉄砲尾根と言う名が残っている。

とくに清水越えは、越後の清水村から清水峠を越えて、湯檜曾川を下って来る道であるが、謙信の軍は清水峠から朝日岳を回って宝川に出て、利根川を下る道を「謙信道」と言い、よく使われたと言う。

この清水越え、土樽越えも、謙信の関東遠征の初めの頃だけで、北条氏と内約した武田勢が、関東に進出し、越後に攻め込む体勢を示したので、上杉謙信は防衛するのに困難な清水越え、土樽越えの二道を閉鎖してしまった。

そして、永禄十二（一五六九）年に、上杉と北条とは講和を結ぶが、北条の使者は三国越えで越後の春日山に入る。その後「上杉記」によれば蒲子三郎景虎と甥の喜平次景勝との家督争いに、景虎の実家北条氏が応援のために清水峠を越えた事が、明確に文書に記されている。なお、同書には、沼田城代藤田信吉と兵八十騎が北条氏との戦いに敗れて天正十（一五八二）年六月十三日の夜半、この峠を越えて翌日越後の清水村に着いた事も記されている。

四、口留番所

さて時代は下り、江戸時代に入ると、清水越えの備えに、口留番所が湯檜曾に作られた。

徳川幕府は、表向きは交通取り締り、治安維持、犯人の検問等のため関所及び番所を方々に置いた。当地方としては、三国街道の関所を狼ケ京に置き、清水峠の監視としては、湯檜曾に番所を置いて、交通を停止した。また、藤原にも会津への備えとして口留番所があったと言う。

町誌「みなかみ」によると、番所は関所と違い、交通を停止するためのもので、口留番を配付してその条目を堅く守らせ、近隣のものの止むを得ない用事のための交通を認める外、全て交通を止めた。そのため越後から、大変苦

労をして湯檜曾に到着した者達も、これを越後口に追い返し、怪しいものは番所詰めの者を附きて、行動を監視し越後に退去させた。

番所開始の時期は定かでないが、寛永時代（一六二四年～）沼田城主真田河内守信吉の頃より明治元（一八六八）年まで続いた。

「入り鉄砲に出女」については特に厳重を極めた。関東一帯防衛の一環を為していたことがうかがわれる。番所だけで手の足りない時は、近村から助合が出る仕組になっており、番所は湯檜曾阿部家（本家）が代々これを仰せ付かっていた。

古文書にも、利根郡栗沢村の百姓が、清水村へ逃げて行ったので意見して、帰してくれるように、との頼み状や、清水峠の通行を禁止したのでこれを犯したものは打ちとってもよろしい。そして、その財宝は打ち取った者へ与えると云う厳しい書状やら、或は、旅まわりの役者達が通行禁止を知らずに、越後から清水峠を越えて利根郡大穴村へ来てしまったが、どう取り計らったらよいか等があるので、通行がまったくなかったのではないらしい。その後領主は替り、往来も途絶えがちとなり、道も忘れ去れていった。

五、清水道の開削

天保十五（一八四四）年四月御奉行所宛に、越後米輸送のため、栗沢入りから越後国清水村へ道路の開削計画が、江戸谷中の商人頼平と勢多郡（現在利根郡、ともに沼田藩）糸井村石井与平治等により進められ、数回の実地調査が行なわれた。

これは越後米が良質であり、年貢米として重宝がられたが、江戸への輸送は、遠く奥羽回り又は西海四国回りで、これに比べ米賀も損わず短期間に輸送出来る見込みがあるとして、御国益御便利筋を強調し、願書が出された。また、この事業に関しては月夜野町や沼田町からも相当力を入れており願書が出されている。

また、嘉永三（一八五〇）年には石川土佐守役所へ、嘉永五年に再び領平は会津御蔵人御奉行所宛に願書を出している。

嘉永六年には、いよいよ道路切開きの機が熟した模様云々とある。文久三（一八六三）年八月には、嘉永年度の見分後一時沙汰止みになっていたのを今度又切り開きの沙汰なので、もっと近道、水の便のよいところがある故もう一度見分しなおしをしてくれと言う願い文が栗沢から出ている。

しかし、その反面三国街道筋各宿駅意見として、もし清水街道が開通し、旅人の荷物がみんなそこを通るようになると、もはや生活できなくなると、こぞって反対し、不許可にするよう願書が出されている。

また、文久三年には、吾妻郡（現在利根郡）永井宿、利根郡相俣宿や遠く金古宿など十三宿の連印で、ここの時期になると直接反対する事は出来なくなり、）御廻米（年貢米）穀類の運送路にして、旅人や売荷等一切通さないで欲しいと言う願書が出される。

しかしながら時は幕末の風雲急を告げる折り、結局工事が行なわれないまま、明治維新を迎えることになる。

六、清水越新道の完成

明治六（一八七三）年河瀬秀治熊谷県令は清水越え新道の開削を決意し着工する。

翌明治七年十月、道幅二メートル、距離約三十キロの山岳道路が開通した。

更に明治十一年国道として測量を開始して同十四年に着工、同十八年に全通した。

高崎～長岡間延長百八十キロ、幅五メートル以上、当時としては模範的な道路であった。工事に際しては、沿道農民の反対もあったり、難工事にも遭

遇したが、五か年の年月と、工費金三十五万円を費やしてこれを完成した。

開通式は明治十八年九月七日、湯檜曾と上越国境に式場が設けられ、北白川宮殿下を始め、山県内務卿、三浦陸軍中将、桃取元老院議官、内務司法秘書官、土木局長、群馬、新潟両県令その他関係官公署長等で馬車三台、人力車百余輛、守衛の警官百名余りでその行列は長さ十余町に及び実に空前の大盛事であった。仮御殿で祝宴が催され、花火が打上げられ、千百の提灯がゆれ、見物人は遠近より数千人に及んだと言われている。

七、つけ加えて

清水峠越往還の起点を、沼田城大手門に向かう本町の辻、御馬出しとする。

清水峠越往還の道筋については断定しがたい点が残ったので書き加えておく。

沼田から後閑、そして、そのまま水上へ進む道を清水道と決定したが、後閑で渡河をして月夜野から上組を通り水上へ行く道、いわゆる利根の川西道を、清水道だと云う人もある。

しかしそれを決める物は何もなかった。つまり道標や石造仏などに「しみず」と刻まれていれば、或は地図絵図に記されておれば、しかし何も発見できなかったのである。

川東道としても同様に決定付ける物はなかった。

次に道の呼び名について、白岩や井土上の辺りでは三国街道と呼び、後閑では南の方を沼田道或は沼田町往還、北の方は清水街道だと言う。勝浜の集落では、古い道が二本あって、川手の方の道を殿様街道と言うが、おもしろいのは、戸倉（上牧分）では、山手の道が殿様街道と呼ばれている。北に向かう道は清水街道、それに藤原道とも言う。

川の西の上組、石倉では川西道路を藤原道と言い、道標や石仏にふじ原道と刻まれている。水上では南の方を沼田街道、湯檜曾から北を清水峠越え、或は直越え、越後街道と言い、藤原への道は藤原道と呼んでいる。

最後に、清水峠越往還は群馬・新潟県境の標高一、四四八メートルの高さを持つ清水峠を越えて通ずる険しい道であって、風土を全く異にする表日本関東と裏日本の越後を結ぶ貴重な道でもあった。（湯檜曾、標高約六〇〇メートル越後の清水村迄徒歩で六時間以上かかると言う）

II 道の確定

一、道の確定

清水峠越往還は、沼田を起点として国鉄上越線に沿って、政所―後閑―湯原（水上）―湯檜曾―清水峠に至るもので、県内総延長距離約四〇キロの街道である。

まず、現在の地名からこの街道の概略たどってみると、沼田―椽名―硯田―恩田（以上、沼田市）―政所（まどころ）―真庭―後閑―下牧―上牧―奈女沢（なめざわ）（以上、月夜野町、以下、水上町）―高日向―小仁田―川上―湯原―大穴―幸知―湯檜曾―清水峠である。このうち、後閑―川上間は、別ルートとして、月夜野―小川―石倉―小仁田―川上がある。

1　沼田城下から真庭政所集落へ

利根・片品・薄根の三河川に囲まれ、その河岸段丘面上に立地する城下町沼田は、現在、城こそ残っていないが、町名・町並や寺社の分布から城下町の面影を残している町である。その市街地の中ほどにお馬出し通りと呼ばれる通りがある。清水峠越往還（以下、旧道と呼ぶ）は、ここを起点としているのである。

お馬出し通りから国道一二〇号線に出た旧道は、西に向かい、滝坂（標高差一〇〇メートル）と呼ばれる急坂を一挙に下る。この崖は、ここより一キロ程西側を流れている利根川によって作られた大きな段丘崖である。

沼田市から清水峠（谷川）方面をのぞむ

沼田市　滝　坂

旧道はこの坂を下った後、崖下に沿って小道を北進し薄根川に出る。

上越線の鉄橋から一〇〇メートル上流の地点を渡った旧道は、そのまま鉄道に並行して約六〇〇メートル続いている。この付近は新興住宅地として住宅が建ち始めており、旧道の面影がみられない所である。

武尊神社前で踏切を渡った後、旧道は道幅が狭くなる。四釜川という小さな川を渡る付近には道端に石仏が点在し、水車跡があるなどよく旧状をとどめている。

四釜川を渡ってしばらくの間、旧道は住宅地の中を縫うように通っている。そこから約七〇〇メートル余り先にナショナル木材という大きな工場がある。旧道はその工場の脇を通っているが工場の敷地と区別がつかない。しかし、変電所の脇に残されたいくつかの石仏から旧道がここを通っていたことを知ることができる。

この工場を過ぎてまたしばらく旧道の面影が残された道が続くが、交通量の多い国道一七号線によって遮断されてしまっている。

国道を横断してまもなく旧道はお宮のある三差路に出る。旧道はここから約七～八〇〇メートルの間、二つのルートがある。

一方は、再び国道に出てそのまま進み、政所の交差点で左折するもの。もう一方は、三差路を左に入り利根川が作った小さな段丘崖を下ってそのまま崖下を北進するものである。

沼田市　武尊神社付近の旧道

月夜野町　政所の旧道

前者は、国道のため直線的なルートであるのに対し、後者は、道幅も狭く曲がりくねった道である。熊野神社手前の段丘崖下からはわき水が湧出しており、多少、道筋が不明な箇所もあるが、旧状をよく残しているといえよう。

2　真庭政所集落から後閑集落へ

政所の北の外れで合流した旧道は、真庭へと進むが、この区間は、現在の道幅四メートルほどの町道に沿っている。

一部分、この道から外れ、牧根用水の脇を通る。旧道は小川を渡った所で小道に入りそのまま後閑へと向かう。この道は、役場西側の家屋密集地を通り、ふたたび町道に出て月夜野橋の交差点に至る。

この政所から後閑まで旧道の右（東）側には、小さな崖が続く。これは熊野神社付近の段丘崖が連続したものである。つまり旧道は常にこの段丘崖下

月夜野町真庭　牧根用水と旧道

月夜野橋と国道17号線

を通っていることになる。

これは、崖下から湧出するわき水を得ることも一つの条件であったことだろう。反面、利根川が一度氾濫すれば、水害を受けるような地域であったろう。

上牧戸倉　からす峠――戸倉間

月夜野町小松　子持神社付近の旧道

3　後閑集落から川上集落へ

後閑から川上までのルートは、利根川をはさみ両側にある。

利根川左岸（東側）を通るものは、水上有料道路沿いに下牧―上牧―奈女沢―高日向―川上と通ずるもので、右岸（西側）を通るものは、国道二九一号線沿いに月夜野―小川―石倉―小仁田―川上と通ずるものである。

そこで、まず、左岸ルートから道筋をたどってみると、

月夜野橋交差点から約五〇〇メートルの区間は有料道路際の牧根用水沿いにあったが、今は消滅している。しかし、上越クリスタルの工場から北二～三〇〇メートル先から旧道が残っている。有料道路から左（西）側へ入った小道がそれである。

牧根用水沿いに約一・三キロ、有料道路を横断し、牧野神社前まで続いている。

この区間は、道幅も狭く、利根川の氾濫対策のため造った屋敷の石垣や、元鍛冶屋で使用した水槽などがこの通り沿いに残り、昔の生活、風土も見ることができ、旧状をよくとどめている。

牧野神社付近の旧道は、上越線建設に伴って消滅している。

ここから約二キロ先の勝浜までの旧道は、平坦な河岸段丘面上を通ることになる。（この付近の平坦地を地元では烏原と言う）

のどかな山村地帯をぬける旧道は、車一台分程の道幅である。

勝浜から木ノ根までの旧道は、山越えルートと利根川沿いのルートに分かれている。

山越えルートは、勝浜から沢沿いに上り、地元の人々が「むじな峠」・「烏峠」と呼ぶ峠を越えて戸倉に下り、集落入口を左に曲って木ノ根に向かう約二・五キロの道である。古老はこの道のことを殿様街道と呼んでいたが、今は全く使用されず廃道となっている。

利根川沿いのルートは、勝浜から小松発電所上を通り上越線を越えて子持神社裏に出た後、有料道路と利根川の間を通り木ノ根に至る約一・五キロの道である。小松発電所上流の利根川は、大きく蛇行しており、当時は現在の流路と異なっていたと考えられる。現在、旧道は河川の中を通っている。当時でもこの道は氾濫することに流失してしまったことであろう。

この二つのルートは、木ノ根の不動堂前で合流し、四ケ村用水路沿いに月夜野北小・月夜野中学校へかうが、一部は不明である。

旧道は、月夜野中学校前から有料道路を横断し、利根川沿いの小道のルー

トを通って奈女沢に通じている。奈女沢を過ぎるとすぐ水上町である。この水上町に入って間もなく有料道路の料金所が見えるが、旧道はその手前二〇〇メートルのところを東側に入り高日向へ向かう。

この部分は、道幅一メートル程のあぜ道で、ここからふたたび有料道路を横断し、さらに上越線を越えて銚子橋のたもとに出る。この区間も一部分旧道は消滅している。

銚子橋は、現在架けられている橋より少し下流の川幅の広い地点にはね橋が架かっていたようであるが、その面影はない。この地点から川上の諏訪神社前までは、一部わき道を通る外は有料道路となっている。

神社前から旧道は、西側を通り有料道路を横断し、さらに利根川岸を通って母谷沢まで続いていた。しかし、この区間もすべて廃道となっており、わずか川岸に松並木がその面影を残すのみである。

水上町銚子橋　旧道は橋の右側アパート付近を通る

利根川右岸ルート　月夜野町石倉付近

さて、ここまでが後閑からの左岸ルートである。この母谷沢付近で右岸ルートと合流していると考えられる。

次に、右岸ルートをたどってみることにしよう。

後閑の役場西側の旧道からそのまま利根川岸に続く小道がある。対岸には、月夜野第一中学校が見え、さらにその左端を小道が続いていることがわかる。これが右岸ルートである。

天正年間（一五七三―一五九二）にその上流三〇〇メートルに後閑橋（現在の月夜野橋）が架けられた。それ以降、現在の国道一七号線が旧道となっている。

中学校南側の旧道は、七〇〇メートルほど進むと国道に交わる。この地点で、旧道は国道一七号線からはずれ、桃野小学校校庭内を通り利根商業高校西側で、国道一九一号となる。

ここは、かなりの急坂で、この坂を上りつめた所が橋下である。この集落で国道から一時離れ、左側の小道に入る。この小道は約一キロ続き橋上でふたたび国道に出る。

ここは、現在、上越新幹線上毛高原駅建設工事が行われている。このため、今後この付近の変容は激しいであろう。

橋上から水上町の川上までの旧道は、現在の国道一九一号である。

旧道は、河岸段丘面上に発達した集落を結ぶようにして造られている。

途中、数本の小さな沢を渡るため、多少の起伏はあるが、ほとんど平川な道のりである。

この付近になると、対岸の左岸ルートは、起伏の激しい道となり、一部は水害の心配などがあるのに対し、この右岸のルートの方が安全なルートなのかも知れない。

水上町の小仁田を過ぎ、川上集落に入った旧道は、そのまま北進し、集落をすぎてから急坂を下って、有料道路に出る。そして、この道路を二〇〇メー

トル程進んだ母谷沢にかかる橋付近で、左岸ルートと合流する。

4　川上集落から湯檜曾集落へ

母谷沢付近で合流した旧道は、有料道路西側の坂を上り、さらに湯原の健明寺前に向かっているが、その大半は廃道化している。

ここには二本の橋が架かっているが、旧道は小さい方の橋の部分を渡ったのであろう。

その後、水上町郷土資料館前の道路を通り、途中東側の狭い道を通って谷川に向かう。

現在、谷川には風橋というコンクリート橋が架けられているが、昔は、この少し上流にはね橋が架かっていたそうである。橋は残っていないが道筋は残っている。この部分の谷は、大変深く約二〇メートル程あり、昔、ここに橋を架けることは大工事であったことだろう。

この谷川から奥利根館（旅館）前までの旧道は現在の有料道路及び国道二九一号である。（ただし奥利根館手前五〇〇メートル程は、川岸に近い小道が旧道となっている。）

奥利根館前に大穴スキー場へ向かう道（道幅二メートル程）がある。これが旧道で、この道をそのまま進むと上越線で行き止まりとなるが、旧道はそのまま線路の部分を通り、湯檜曾駅、さらに湯檜曾川右岸（西側）へ続いていた。

水上町　川上北の利根川右岸と左岸ルートの合流付近

水上町役場付近の旧道

5　湯檜曾集落から清水峠へ

湯檜曾川右岸から左岸（温泉街）へ渡った場所は、現在の橋より上流の林家旅館の裏側付近と言われているが定かでない。

温泉街内の旧道は、現在の通りであるが、温泉街の北の朝日神社裏からは山側の未舗装の道となる。

この道は、約一キロ続き赤沢を渡った所からふたたび国道二九一号線となる。

その後、旧道は土合まで現在の国道となっている。トンネルに入る手前で右側に入り鉄道を越えて山の家前まで通じていたが、現在は、廃道化している。

谷川ロープウェイ山麓駅の下に砂防ダムが造られている。旧道は、この湖底を通り湯檜曾川沿いに続いていたが、現在その道が残っているのは、ダムから上流一・二キロ程先のマチガ沢の下からである。

旧道は、ここから三・五キロ上流まで川沿いに続く。

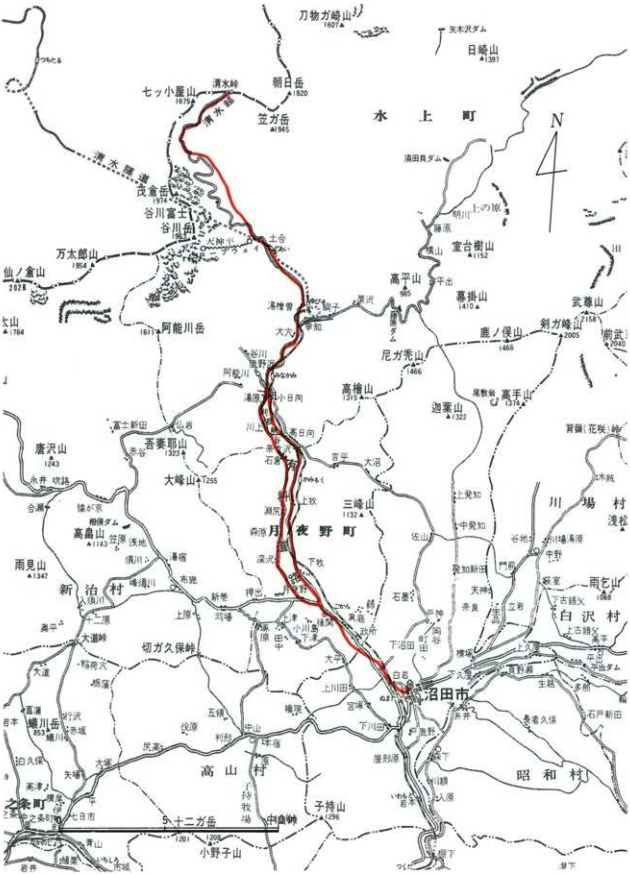
この三・五キロ先で、道は大倉尾根を通り朝日岳へ向かう道と白樺小屋へ向かう道とに分かれるが、旧道は白樺小屋へ向かう道の方である。

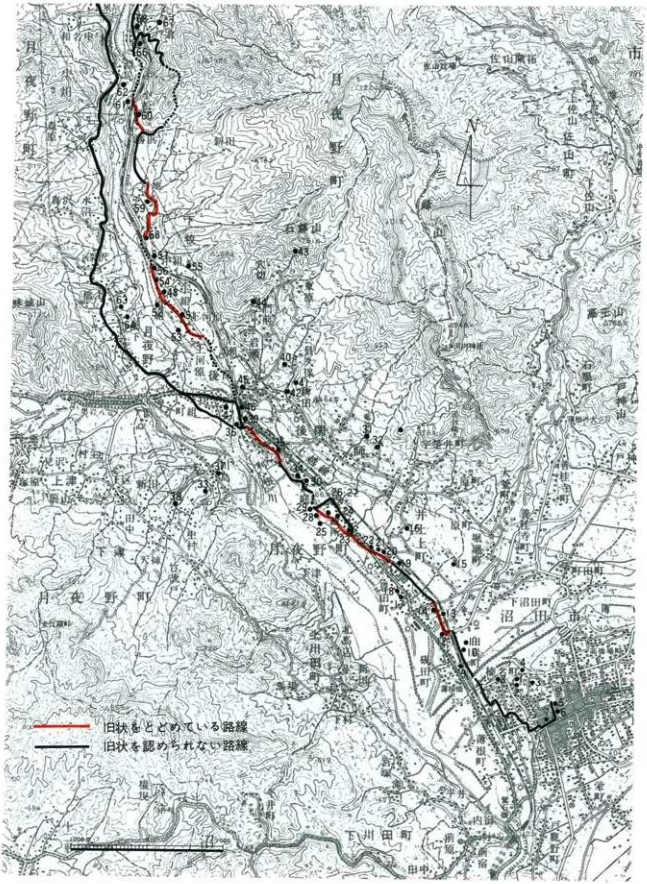
この小屋までは、標高差四〇〇メートルもの急坂を一挙に上る。
この白樺小屋でまた蓬峠へ向かう道と、清水峠へ向かう道とに分かれる。
右側へ進む清水峠への旧道は、比較的緩斜面な道で、国境の清水峠までは、
あと約五キロの道のりである。

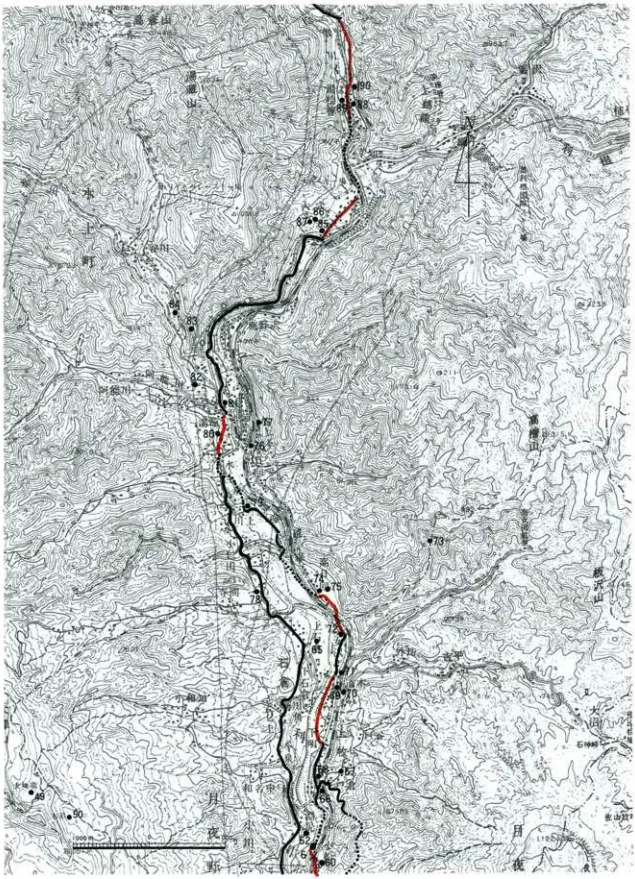
湯檜曾温泉街内の旧道

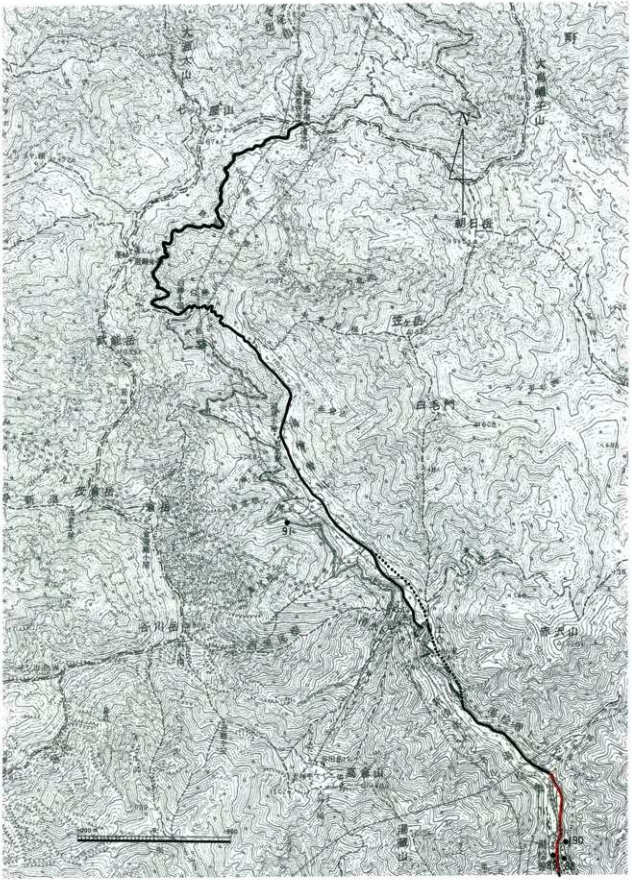
水上町湯檜曾北方の旧道

二、沿線地図


刀物ガ峰山
矢木沢ダム
日崎山
朝日岳
七ッ小屋山
清水峠
笠ガ岳
水上町
N
清水隧道
茂倉岳
谷川富士
谷川岳
万太郎山
仙ノ倉山
阿能川岳
室台樹山
高平山
幕掛山
武尊山
鹿ノ俣山
剣ガ峰
尼ガ禿山
高檜山
迦葉山
高手山
唐沢山
吾妻耶山
大峰山
三峰山
月夜野町
高畠山
雨見山
新治村
切ガ久保峠
白沢村
沼田市
高山村
昭和村
子持山
十二ガ岳
小野子山
川場村


旧状をとどめている路線
旧状を認められない路線
月夜野町
月夜野
月夜野駅
月夜野川
上津
下津
沼田
沼田市
下沼田町
上沼田町
下川田町
上川田町
月夜野駅
旧駅
N




大源太山
七ツ釜山
大高嶺子山
野
朝日岳
笠ヶ岳
武能岳
白毛門
91
奈良切
谷川岳
蓬峰山
湯檜曽山
90
1000m
0
1000

Ⅲ　清水峠越往還の現状と文化財

一、沼田城下から真庭政所集落へ

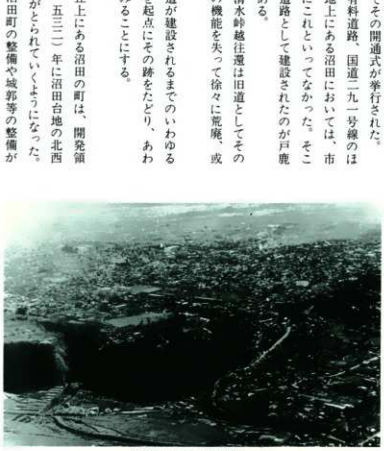
明治十八年九月に高崎・長岡間を結ぶ清水越新道が建設され、北白川宮親王をはじめ政府高官を迎えて、清水峠においてその開通式が挙行された。

この清水越新道が現在の国道一七号線と水上有料道路、国道二九一号線のほぼ原型をなしたものであるが、しかし当時台地上にある沼田においては、市街地からこの新道に直結する道路は里道以外にこれといってなかった。そこで、この新道と沼田の市街地を結ぶ経済上の道路として建設されたのが戸鹿野新道と沼田、薄根間を結ぶ榛名坂の道路である。

この新道の建設、完成によってそれまでの清水峠越往還は旧道としてその地位を後退させられ、人馬輸送の動脈としての機能を失って徐々に荒廃、或いは湮滅の運命を余儀なくされていった。

そこで、江戸時代から明治初年に清水越新道が建設されるまでのいわゆる清水峠越往還はどこを通っていたのか。沼田を起点にその跡をたどり、あわせて旧道に沿って散在する文化財等を拾ってみることにする。

片品川、薄根川、利根川に囲まれた河岸段丘上にある沼田の町は、開発領主である沼田氏十二代の沼田顕泰が天文元（一五三二）年に沼田台地の北西隅に沼田城を築いて以来、城下町としての形態がとられていくようになった。沼田氏の滅亡後は真田氏の居城として、更に沼田町の整備や城郭等の整備がおこなわれてより一層の発展をみるようになった。沼田城も真田氏によって五層の天守を段丘崖上にそびえさせて、江戸城と並ぶ関東の名城として天下に瞠目されるに至った。しかし、この真田氏も第五代の伊賀守信直の時に苛斂誅求の農政をおこなったかどで、天和元（一六八一）年改易されてしまい、天下の名城沼田城もこの時破却されてしまった。



上空より見た沼田城跡

この頃の沼田からの清水峠越往還はどこを通っていたかについては、真田氏が改易された翌年の天和二年作の沼田城下地図を見ると沼田城の大手門からお馬出し通りを右に折れて下之町、袋町から滝坂口へ出て白岩村、硯田村（現、沼田市白岩町、硯田町）へと通ずる道が描かれている。恐らくこれが当時の沼田から清水峠越往還に通ずる道であり、江戸時代を通じ

ての変わらぬ道であったものと考えられる。そこで、この道の現状の姿を沼田城の大手門跡を起点にたどってみる。

沼田城は蔵内城ともいい、その跡は現在沼田公園として市民に開放されている。公園としての整備も行き届いており、春になると色とりどりの花が一斉にその妍を競って訪れる者の目を楽しませてくれる。中でも圧巻は旧隅櫓跡にある御殿桜で樹令推定三〇〇年の彼岸桜である。その大きな枝ぶりの下では毎春花見の宴が催され賑わいをみせている。この御殿桜に象徴されるように沼田市の花木は「さくら」と制定されており、沼田城跡の桜、城堀川の桜並木など城下町にふさわしい彩りをそえている。

沼田公園内には国の重要文化財に指定されている旧生方家の住宅が移築、保存されている。一七世紀末の商家建築の様式をとどめており、東日本では最古の商家造りとされている。この生方家はもと沼田上之町の町角にあって、「ふぢや」と呼ばれていたが、いつしか「かどふぢ」と称されるようになってそれが屋号として用いられてきた。昭和四十九年より一般に公開されている。

その他沼田公園内には、沼田公園建設に際して多額の私費を投じた久米民之助氏の頌徳碑や、俳人村上鬼城、金子刀水の句碑、沼田の歌の歌碑等が建っている。また、沼田氏最後の城主沼田平八郎景義が叔父に謀殺され非業の死を遂げた際に、首実検をした石といわれる「沼田平八郎首石」がある。

沼田城の大手門付近は現在沼田小学校の校地になっている。その校門からまっすぐ南に大手通りがのびている。校門の前に立って左の方、東側を見るとすぐ近くに沼田市役所の建物が建っているが、その一角にはかつて鐘楼があり、明治二十年代から昭和三十九年までの長い間にわたって沼田市民に時をつげ、市民の愛郷のシンボルとなっていた時鐘がある。この鐘楼は昭和三十九年沼田市役所改築の際に破却され、時鐘は現在沼田市役所の市民ホールの一隅に安置されている。しかし、時鐘とはいってももとは城鐘で寛永十一（一六三四）年に時の沼田二代城主真田河内守信吉が領内の安寧を祈願して、沼田鍛冶町で鋳造したものといわれている。その後、真田氏の改易と共に数奇な運命をたどりながら、昭和二十九年に県の重要文化財に指定され、現在に至っている。市民の間に鐘楼再建の機運が高まってきており、近々昔懐しい鐘楼が再びその姿をあらわすものと思われる。

大手前通りは沼田小学校校門から表町通（伊勢町通）と交差するおよそ九〇メートルの通りであり、表町通を越えて本町通りに至る間をお馬出し通りと称している。このお馬出し通りに入るとすぐ左側に神明宮と東禅寺がある。

神明宮は沼田氏時代に伊勢内宮を蔵内城内に勧請し、祭祀をおこなっていたが、慶長十七（一六一二）年真田伊豆守信幸の時、城修築に際し城内より現在地に遷したものである。従って表町通りを伊勢町通りと称したのも、この神明宮に由来している。

この神明宮の社地の一角に彫のよい常夜燈が一基置かれている。この常夜燈は嘉永五（一八五二）年十二月に沼田の町人木檜屋七左衛門が旅人の便や安全祈願のためと弁財天に対する信仰から滝坂中段に奉納寄進したものである。優美なその姿は、恐らく信州高遠の石工の作であろうといわれている。当時、毎夜暮六ツ（日没）に滝坂下り口付近にあった滝坂御門が閉じられると、常夜燈に火が点じられ、そのあかりは遠く三国峠から認められたという。その後、明治四十年に現在地に移築されたものである。

神明宮の東側に隣接して東禅寺雨宝殿がある。入母屋造のどっしりとした重厚な建物でそれ程大きくはないが、正面の欄間や虹梁に施された彫刻は精妙で すばらしいものである。この雨宝殿は沼田藩主土岐氏九代頼功が勝軍地蔵尊を祭るため文政十一（一八二八）年に建立したものである。本尊の勝軍地蔵尊はその昔土岐氏祖先の一人である土岐定政が、徳川家康に従って戦陣に馳駆し、しばしば戦功をたてた際、常にこれを背負い、その霊験によって よく家康を守護し、且つ家康軍に勝利をもらしたという伝承のある地蔵尊である。雨宝殿と勝軍地蔵は共に沼田市指定の重要文化財になっている。

お馬出し通りを南に約二〇〇メートル進むと沼田のメインストリートである本町通りに出る。お馬出し通りと本町通りの交差する四つ角には、江戸時代木戸が設けられており、お馬出し角の東側に辻番所が置かれていた。更にはその辻番所脇に高札場が設けられていて「札の辻」とも呼ばれていた。また西側角には沼田検断役の一人である勅使河原家があった。当時の城を中心にした武家の世界と町人の社会の接点の場所でもあったのだが、現在はそれらしき形跡をうかがわせるものは何一つ残っていない。

お馬出し通りから本町通りを越えてまっすぐいくと坊新田になる。その先きは沼須で片品川の渡しを渡って、森下・長井小川田を通って厩橋へ続く道になり、江戸時代の沼田―厩橋間の幹線道路（沼田街道）で、沼田の殿様も参勤交代する時はこの道を通った。

清水峠越往還に通ずる旧道は、お馬出し通りから本町通りを右に曲がって下之町に出るが、この通りは沼田の中心街の一角を形成し、すっかり近代化した商店が軒をつらね、華やいだ雰囲気を醸し出してはいるが、往時を偲ばせる姿は殆ど見あたらない。ただ、下之町を下った鍛冶町通りとの四つ角の北側の歩道に木柵に囲われた高さ約八〇センチ位の自然石が置かれている。「天王石」と呼ばれているが、慶長十七（一六一二）年真田信幸が城下町の敷地割をした際、鍛冶町入口にあった天王宮が道路敷になるので中町の須賀神社へ移すにあたり、跡地にしるしの石として残したものであるといわれている。

下之町と鍛冶町との四つ角から、滝坂に至る間を江戸時代には袋町といった。現在その町名は使われていないが、その袋町を右に曲がるとすぐに左手が滝坂になる。滝坂の下り口の少し北側に往時は滝坂御門があって、沼田城下の治安を守っていた。また今の青池屋旅館の下あたりに弁天様があって、

沼田神明宮社地にある常夜灯

沼田市下之町通り

沼田市滝坂

沼田市榛名町地内の旧道

前述の神明宮の常夜燈も最初はここに奉納されていたものである。

この滝坂には、城下の用水路の廃水が流れおちる滝坂川があって途中小さな滝になっている所もあるが、ほぼ滝坂に沿って並行して流れている。急坂のため流れが速く水量も多かったために、江戸時代には台地下の田畑の用水としての役目も大きかった。更に水勢、水量、地形が水車を回すに適していたこともあって、水車業者は十軒を数える程であったという。ここが沼田城下一帯の穀物加工場となり、住民の食糧を賄う重要な所であった。現在、滝坂は急坂であることから途中に階段が造られ、通行人の便に供されている。

滝坂を一気に下って直進すると沼田駅につきあたるが、旧道はその途中見晴旅館より少し下った所から右に折れて入っていく。折れるとすぐに道は二手に分かれるが、右手の道を行くと榛名神社に行き着く。旧道は左手の道を行くが、分岐した所からおよそ一五〇メートル位の間はほとんど道形が残っておらず、田畑や家屋の下に埋没して消滅してしまっている。その先沼田下町公民館の手前を右に折れて行くと、およそ二〇〇メートル位の間は舗装されていない土の道である。右上方に沼田台地の斜面に点在する家屋を、左方に児童遊園地を見下ろしながら左に折れると、オリエント工芸の工場の先に下りてくる。それを右に曲がっておよそ三〇〇メートル行くと榛名坂の道路と交わる。この間は道路も拡幅舗装され、所々に工場用地の空き地があったりして、道に沿った景観は殺風景である。

榛名坂道は明治中期に清水新道と沼田台地を結ぶ道路として新たに建設されたものである。榛名坂道を右手、東の方へ少し上っていくと榛名神社の森が見えてくる。榛名神社は堆山姫、菅原道真の四柱を合祭する神社で沼田氏以来、真田氏、本多氏、土岐氏の崇敬をうけ、沼田の総鎮守として、沼田では最も由緒深い神社である。

榛名坂道を横切ると、すぐに薄根川の堤防にぶつかる。ここで旧道は薄根川によって対岸の白岩地内の旧道まで分断されてしまう。かつてはここに薄根橋が架橋されていたが、清水越新道の開通により、新しい薄根橋が新道に架橋されるに至って、旧道の橋はいつしか存在価値が薄れ、洪水等によって流失したあとは、架け替えることもなくなり、今は堤防上に立って見ても、その跡形すらうかがうことはできない。間断のない川の流れの音のみが、過去の無常の響きとして耳に残る。

薄根川の堤防に立つと一度に視界が広くなり、雄大な景観が眼前に展開する。即ち東側には沼田台地の一角を占めの沼田城天守閣跡の木立が威圧するかのように聳立し、その下方に小ぢんまりとした榛名神社の森が展望できる。正面には三峯山、東北方には戸神山がたおやかに居すまいを正し、遠くに鑢峰武尊の山なみが白雪をいただいて屹立している。また、眼を西北方に転ずると上越国境にまたがる三国連山が、その中でも谷川岳が一段と大きく白い魔人のように偉容をのぞかせている。更には左手西方には利根川の河原が広

薄根川の堤防より対岸の白岩地内を臨む

奪衣婆と双体道祖神（沼田市白岩町）

く開け、その中を悠然たる流れがうねり、子持山の山なみがすぐそこまで迫っている。まるで一幅のパノラマを観じているようである。

薄根川を越えると清水峠越往還は、旧薄根村へとえる。旧薄根村の最南端に位置するのが現在の白岩町であるが、この白岩町地内を通る旧道は、薄根川の堤防からおよそ七〇〇メートル位行くと上越線の線路と交差する。そして、旧道は線路の右側から左側へ位置をかえながら、線路に沿って恩田町地内へと入っていく。

白岩町内の旧道は地域の生活道路としての利用度も高く、すっかり舗装されてきれいになった道路からは、昔の面影は汲みとれない。白岩はかつては戸数も少なかったが、今では住宅地としての開発が進み、新築間もない色とりどりのいらかの住宅が目に映る。旧道は大河がゆったりと流れるように、右に左に大きくゆるくカーブしながら、上越線の線路につかず離れず、ほぼ

沼田市白岩町　観音堂跡の石仏群

沼田市恩田町　旧　　道

並行して走っている。そして家並が線路をさえぎるようにして建てこんだ、とある住宅の敷地の一角に、双体道祖神・馬頭観世音・庚申塔に取りかこまれて奪衣婆と懸衣翁が二体前後して、自然石を組み合わせて祠状にした中に無造作に置かれている。[9] 現代の文明社会の中に取り残された過去の遺物といった感じで、周囲の環境にそぐわない印象が拭いきれない。

これから少し先に行くと、町田町に通ずる道路と交差する「T字路があり、その角に自然石を台座にした芭蕉の句碑が石垣の上に建っている。[10] 碑面からはほとんど文字を読みとることはできないが、薄根村誌によれば

「しばらくは　花の上なる　月夜かな」

の句が刻まれているという。

同じ芭蕉の句碑が近くにもう一つある。町田への道を入って少し行くと左手に墓地があり、そこには無数の墓石と共に馬頭観音・如意輪観音等が無秩序に散在している。この墓地の入口近い所に昔、白岩堂という観音堂があって、正観音が祭られてあったといわれているが、いつごろ廃寺になったのか、今はその御堂は影も形もない。現在、観音像だけは井土上にある成孝院本堂に納められているという。この観音堂の跡に自然石の芭蕉の句碑がある。[11] 高さ一二〇センチ、幅七〇センチ、厚さ五六センチの正面には

「松杉を　誉てや　風のかほる音」　芭蕉

とある。

再び旧道に戻って白岩町を通過すると、道は左に折れ、上越線の踏切を渡り、線路の反対側に沿って恩田町地内へとよっていく。その踏切を渡ってすぐの所に武尊神社がある。[12] 境内の入口に、寛延元（一七六〇）年建立の台座が四〇センチ碑高が一五〇センチの立派な双体道祖神が、肩を寄せ合うようにひっそりとして佇んでいる。又、社殿の周囲にはたくさんの石宮が散在している。これかたものもあるが、ほぼ完全な形をした石宮が十九体ほど数

えられる。倭健命、菅原道真公をはじめ十一柱の神を祭神にしているこの武尊神社も普段は訪れる人とてほとんどなく、さほど広くもない境内は森閑として静まりかえっている。

武尊神社前から恩田町へ通ずる旧道は道幅も狭く、四釜川を途中でわたるために、やや上り下りの勾配があり、しかも桑畑の中をうねりながら走っているので、春にはひばりのさえずりが聞こえてきそうな野中の一本道といった具合で、昔の往還の風情が何となく偲ばれるような感じである。四釜川の橋上に立つと、右手に朽ちはてた水車小屋がそのまま放置されていたりして、それがまた往古の街道の姿を彷彿とさせる。だからこの辺一帯の旧道は舗装されてはいるが、昔の往還そのままの道形を残しているように思われる。四釜川を越えるとすぐに道が二手に分かれる。土地の古老の話によれば、左手の道は江戸時代薄根と月夜野の真庭を結ぶ道としての中道、それに利根川の河原沿いに進む河原道につながっていたという。

右手の道を行くのが清水越往還で五〇メートル程歩くと、右側に小屋の中に入った大きな地蔵が建っている。[13] 蓮台が七七センチ、地蔵の高さが一二〇センチあり、土地では延命地蔵と呼んで今でも信仰の対象になっている。この地蔵尊は宝暦十二（一七六二）年に先祖両親の菩提のため、廻国供養をした信州水内郡飯山邑の市兵衛という人が建立したもので、台座の裏側に当山現住独照代と書いてあり、成孝院入口にあったものを現在地に移したという。

お地蔵さんに手を合わせたあと、更に道を一〇〇メートル程進むと、左手の路傍の桑の木の根方に、取り残されたかのように四〇センチ位の小さく粗末な一体の馬頭観音が夕日を浴びてひっそりと佇んでいる。[14] うっかりすると見落してしまいそうな位に目立たない。いつの頃のものかわからないが、幾星霜の風雪に耐えてきた孤独なたたずまいに、幼き頃の童唄が聞こえてきそうな錯覚にとらわれたりする。

旧道はやがて薄根小・中学校に通ずる通称「学校道」と交差し、それを横切って更に北上する訳であるが、この周辺の文化財を見るには一旦旧道からはずれなければならない。

沼田市井土上町　荘田神社の大公孫樹

まず、旧道から学校道を右に折れて、およそ三五〇メートル位進むと、左手に井土上町へ通ずる道がある。それをおよそ四五〇メートル位進んで右の方へ迂回した台地上に荘田神社があり、そこに県指定天然記念物の大公孫樹がある。[15] 高さ五一・五メートル、目通り九・七メートル、根元廻り一三・六メートルで、樹令千年以上といわれている。ひときわ高く天空にそびえ、他を圧する偉容である。

荘田神社から一旦、台地下の道路に出て、更に北西の方向に七五〇メートル位進み、右へ迂回しながら再び台地の上へ上っていくと荘田城跡がある。[16] ここは沼田氏発祥の地とされ、沼田氏が最初に居を構えた所である。沼田氏には前期沼田氏（大友沼田氏）と後期沼田氏（三浦沼田氏）の両沼田氏があり、前期沼田氏の初めは、利根四郎経家の祖先が平安時代の中期ここに城を構え、経家以来、庄田、沼田氏などを称してきた。経家は孫大友能直と重縁の三浦氏が、宝治元（一二四七）年北条時頼に滅ぼされたとき、一族の一人が逃れてきて沼田景泰と称し、城郭とした。これが後期沼田氏である。以後、八代一五八年経過して応永十二（一四〇五）年町田の小沢に城を移すまで沼田氏の居城であった。往時は城跡外に荘田沼があり、幾多の物語を伝えているが、その沼も今はない。現在、本丸跡に八幡宮が鎮座しているが、城郭の

跡とおぼしき遺構はほとんど消失して、ただ一面に田畑が広がっているのみである。

荘田城跡から再び旧道に戻り、旧道と交差する学校道を今度は左側、西の方へおよそ三〇〇メートル位行くと国道一七号線に出る。国道を右に折れて二〇〇メートル位行くと左側の国道端に薬師堂と更にその奥に大宝院塚がある。この薬師堂と大宝院塚の間にはわずかに昔の遺形が残っているが、これは往古、薄根と月夜野真庭を結んだ中道である。小さな薬師堂のすぐ裏に墓地があり、その中に薬師堂庵主である、開主の雲海上人の元禄四辛未天八月二十九日と刻まれた卵塔が残っている。また薬師堂の前には真田の殿様から拝領し、植栽された〝大名竹〟と呼ばれている竹藪の一部や、元禄十年の青面金剛を刻んだ庚申塔をはじめ六地蔵石幢・多宝塔・馬頭観音・如意輪観音供養塔など多数の石仏群が残されている。

沼田市恩田町　元禄10年銘の庚申塔

薬師堂の三〇メートル位北に大宝院塚がある。新治村須川の大宝院第六世昌月覚端法印が真田伊賀守改易の端緒になった義民茂左衛門の直訴状を書いたことが露見して捕えられ、沼田へ引き回されたのち、一旦帰山を許されての帰途、ここ恩田に於て伊賀守の家臣に再び捕えられて、その場で石詰めにされ殺されてしまった。現在、その跡には地元の有志によって立派な供養塔が建立され、碑面にはそのいわれが刻されている。

再び清水峠越往還の旧道に戻る。旧道は通称〝学校道〟を横切って北西の方角へ進む。道の両側には最近新築されたばかりのしょうしゃな住宅や商店が軒を連ね、新興の住宅地としての清新さが感じられる。しかし昔の道形なりに家が建ち並んでいるので、道はうねうねと曲りくねって道幅も狭い。土地の人達は、この辺一帯を冗談半分に〝恩田銀座〟と呼んでいる。この恩田銀座を二五〇メートル位進むとナショナル木材工業の構内へ入っていく。右側には高く積まれた木材の置場、左側に大きな工場群を見ながら広い構内の中を歩いていく。しかし旧道は構内の道路と一体化してしまっているので、昔の道形は全然残っていない。そして構内の片隅の石垣の上に、馬頭観音や如意輪観音、地蔵、卵塔、石宮などおよそ三十体の石仏群が集められ、ひしめきあうようにして置かれている。[19] かつてここには大原寺という寺院があったが、明治初期に廃寺となり、今はこれらの石仏群が寺跡であることをわずかに偲ばせるだけで、昔の面影、今いずこという所である。[20]

ナショナル木材の構内を抜けてしばらく行くと状橋地蔵尊がある。これは月夜野の義民杉木茂左衛門供養のために建てられたものである。茂左衛門が領主真田伊賀守の虐政に対して、領民の窮状を将軍に直訴した罪を問われ、磔刑を申渡されたが、それを聞いた領民総代が出府して助命願した結果、聞届けられて天和二年十二月五日赦免状を携えた幕使が馬を走らせてここまで来た。しかし、時既に遅く茂左衛門は月夜野竹之下河原において処刑済と聞き、使者は落胆、空しく帰府した。ところが、土地の人達は茂左衛門の死を悲しみ、使者の帰った土橋の傍らに一基の地蔵尊を建立してその冥福を祈った。これが状橋地蔵尊のいわれであるが、昔は月夜野の茂左衛門地蔵尊の春秋二回の彼岸供養と共に、この状橋地蔵尊への参拝も多く、香華が絶えなかったといわれているが、今は月夜野の茂左衛門地蔵尊において、盛大な供養が営まれ、参拝客も多いが、状橋地蔵尊の方は忘れ去られた形になっている。

状橋地蔵尊わきの用水にかかった状橋を渡ると道は舗装されていない土の

道になる。ところが昭和五十五年十月下旬の調査時点ではたしかに土の道であったのだが、その後昭和五十六年一月に再調査に訪れた時にはコンクリートが流しこまれて、簡易舗装の道と化してしまっていた。いつのまにか自然の景観が一つまた姿を消してしまっていた。この道の両側には田や桑畑が開け、農家なども点在し、あるいは味噌蔵のついた珍しい白壁の土蔵があったりして、左手五〇メートル位の所を車が激しく行き交いする国道一七号線を除けば、ごくのんびりとした田舎の道という雰囲気である。右手のやや小高い台地上に墓地があり、たくさんの墓石にまじって馬頭観音や如意輪観音、地蔵などの石仏群がある。

旧道はいよいよ沼田市のはずれ、月夜野町との境にかかることになるが、道端の用水路の傍らに一基の馬頭観音が置かれている。[22] 享和という年号の入ったこの馬頭様は村のはずれの石仏として、長い間、道を行き交う人の姿をじっと眺めてきたものであろう。ここで清水峠越往還は左の方へ進路をとって国道一七号線と交差する。そして国道を越えたその先は月夜野町の政所真庭へと入っていく。

沼田市井土上町　狀橋地蔵尊

沼田市井土上町　味噌蔵のついた白壁の土蔵

1　沼田城下から真庭政所集落へ

No.	名称	年号	備考
1	沼田城本丸跡		
2	御殿桜		樹齢推定三〇〇年の彼岸桜
3	旧生方家住宅		国指定重要文化財
4	沼田平八郎首石		
5	城鎮	寛永一一年	県指定重要文化財
6	神明宮		
	常夜燈	嘉永　五年	
	東禅寺南宝殿	文政一一年	市指定重要文化財
	建立		
7	勝軍地蔵尊		
	天王石		
8	榛名神社		
9	双体道祖神	寛政　三年	
	奪衣婆		
	馬頭観世音	文久　三年	
10	芭蕉句碑		
11	武尊神社		
12	庚申塔		
	双体道祖神	万延元年	光崚書
	延命地蔵	延享　二年	
13	馬頭観音	宝暦一二年	
14	荘田神社		
15	大公孫樹		
16	荘田城跡		
17	薬師堂		県指定天然記念物
	大名竹		市指定史跡
	青面金剛庚申塔	元禄一〇年	他に六地蔵石幢・多宝塔

22	百八十八番供養塔	天保一五年	
21	三千七百部読誦供養	享保元年	
20	百番供養塔	明和二年	
19	大宝院塚		
18	如意輪観音	宝永元年	
	馬頭観音	明和六年	
	地蔵菩薩	元文三年	
	状橋地蔵尊		
	百番供養塔	享保一三年	
	馬頭観音	享和□年	

二、真庭政所集落から後閑集落へ

小さな流れを渡った右側の石垣の角上に、享和亥天（三年）の馬頭観音に御幣が飾られていて微笑ましい。ここは真庭政所である。短いが急な坂を上り切ると、すぐに交通頻繁な一級国道一七号線を斜めに横切って、ここで道は消え畑の中を進む。左手にやや離れて利根川が見える。二十年程前迄渡し舟が対岸の村にワイヤーをたぐりながら往復をしていた。

真庭政所の清水

塚と言い、かって古墳群があり、直刀、勾玉等出土した。今は一基として見ることはできない。道は清水新道にそいながら進む。正面に大きな地蔵堂、そして石造仏群が並ぶ。[22] お堂の前から清水新道を左にはずれて坂を下り二メートル程の未舗装の道をしばらく進む。

昔、真庭と政所は、村が別であった。沼田城主真田大内記信政は慶安二（一六四九）年現在の地に、札引（抽籤）で宿割をした。そして、真庭から来たものは住所を真庭にし、政所から来たものは政所の住所とした。現在そのために全国でも珍しく入り組んだ住所になっている。また、政所と言う地名も平安の頃牧場の関係からか「まつりことところ」（政治を行った所）と言い、それが地名になったのだろうと言われている。

さて、道は白く乾いている。右手の清水場に寄ると、こんこんと清水が湧き出て流れる。清水は、当時の旅人にとって有難かったものだろう。暖かい日差しを受け、水がキラキラ光って見える。

かたわらに梅の古木が、かぐわしい香りを放っている。右の方には、天王宮があり石宮の出来は素晴しい。

左手の河原に近い所に、大きな馬頭さまが見える。[23]

次いで竹藪を過ぎて森に入る。真庭政所両村の鎮守熊野神社である。[24] 祭神五十猛命他五神に御神宝鏡三面を祭る。境内に正徳四（一七一四）年宝暦六（一七五六）年安永八（一七七九）年の灯篭があり、奥に古い石殿が鎮座している。

松井市兵衛刑場跡

明治頃の春祭りには、山車が出て、競馬や競射、自転車競争も行なわれたと言う。近くには、稲荷様があり、真政寺の寺のあともある。この庚申塔（層塔）[25] 一対は感じが良い。

神社を右に見て進む。ほとんど道なし。今神社は東向きになり、道は裏を通っているが、当時社道に面し南向きだったと言う。墓地の中に進むと、五メートルはあろうか。大変高い石柱塔を見る。花崗岩で造られており「松井市兵衛刑場跡」と記されてある。[28] お堂には市兵衛地蔵が祭られていて、お線香の煙がたちのぼっている。縁先に置いた参詣帳には、多くの参拝者の名があるが、今日の日付の所には、沼田からの人の名が記されていた。

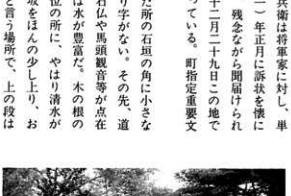
松井市兵衛は、政所村の名主で今を去る三百年前に、真田五代沼田城主伊賀守信澄の重税のとり立ては殊の外きびしく、これに苦しむ民百姓数知れず、幾度かの歎願も空しくかえって罰せられた。市兵衛は将軍家に対し、単身御法度であった直訴を行うべく、延宝九（一六八一）年正月に訴状を懐にして出府し、幕府の大目付、桜井庄之助に訴えたが、残念ながら聞届けられなかった。そして、御法通り天和元（一六八一）年十二月二十九日この地で打首の刑に処せられた。その徳をたたえ、ここに祭っている。町指定重要文化財「松井市兵衛越訴状下書」が残されている。

堂の前を出ると、なみだ橋と言う小さな橋を渡った所の石垣の角に小さな道標があり、[29] 三国と読めるが、その他は剝落しており字がない。その先、道はしばらく切れ、畑、墓地や家の下などになるが、石仏や馬頭観音等が点在する。ふたたび清水の湧き出る所に来た。この清水は水が豊富だ。木の根の所から、音を立てて流れ出る。さらに一〇メートル位の所に、やはり清水が湧き出ていて、もったいない様である。そこから急坂をほんの少し上り、お堂が昔あった所で、清水新道に出る。ここは、十王と言う場所で、上の段は平らで広い。この辺りに、現在の宿に、人うつし村うつしをする前には、真庭一族が住んでいた所であり、真庭氏の墓が並ぶ。

真庭家本家の墓地には、古い五輪塔が並んでいる。[30]

右手の山は、三峯山で山頂近くに、河内神社が祭られており、麓に師の集落がある。町内でも、冬暖かく一番良い場所と言われている。おすわ様と呼ばれ親しまれている三峰神社もあり、また、古いゆかりを持つ、臨済宗龍谷寺には町指定重要文化財「十六羅漢像」が保存されている。[31] そして金山古墳群があり、古墳が十数基並んでいるが、[32] 近く関越自動車道が入って来てインターチェンジが出来る。車道がここの真上を通り、左手の低地で国道一七号のバイパスとつながり、バイパスは利根川を傾斜のある長い橋で渡り、県指定史跡「名胡桃城跡」[33] のそばを、まわり込んで新治村羽場に抜ける。

変った宝篋印塔（真庭氏墓地）



名胡桃城跡

さらに進むと道は右手に少し上る。石仏や馬頭様があり、政所井土上用水に沿って進むと古墳を見る。[34] ここに数基あり、後閑にかけて町内では比較的大きな古墳が点在する。

また道が消えて畑の中を進み、村境の大沢田と言う小さな川を渡ると後閑である。

ここからは、舗装はされているが昔のままの道を歩く。道祖神、馬頭観音などが点々と見られる。やがて月夜野町役場、群馬銀行の下を通り、急に左折すると清水新道に出る。

目の前が利根川で、筏の河岸があった所であり、享保元（一七一六）年七月二十二日正式な筏河岸として始まり、藩の用木を始め一般通行人の荷継場として、昭和三年頃迄賑わった。また、月夜野或は三国街道など往復する渡しのあった所で、明暦三（一六五七）年以後沼田藩の藩船二隻が置かれ、明治五年迄木舟で人を渡すから舟と、馬舟の二隻があった。

さらにこの地を、徒渉と言って、万葉の恋歌が詠まれた場所である。町指定重要文化財「徒渉万葉歌碑」が建てられている。[30]

利根川の　河瀬も知らず
ただわたり

なみに逢うのす
あへる君かも

ただわたりとは、まっすぐに渡る、一気に渡るの意味と思われるが、平安の昔からこの地は、この付近における唯一の渡河点であり、名胡桃城、明徳寺城、小川城が、要点の押えとして築かれたのである。

ここより少し下流には、赤谷川の合流する場があり、利根並びに赤谷の鮎は、上州沼田名物として名が知られていたし、対岸を小川島と言うが、やはり、江戸時代には小川島煙草が有名であった。また、幕末から明治頃には、地芝居が流行し、その舞台が県指定重要文化財「小川島歌舞伎舞台」[31]、町指定重要文化財「中村天満宮舞殿」[32]等が、名残をとどめている。

中村天満宮

徒渉万葉歌碑

琴刀平様のお祭り

道は清水新道を北上する。右手に琴刀平神社があり、ちょうどお祭りで神主が二人、あとは五人程の氏子の役員らしき人のみで淋しい祭りである。ひとこころは盛大で、宵ともなれば通りに川柳を書いた行灯の御神灯に火がともり、夜更け迄人通りが絶えなかったと言う。

賑やかな祭りと言えば、村の鎮守、小高諏訪神社の例大祭の四月一日と十月一日で、秋には、町指定重要文化財「小高神社獅子舞」[33]が、奉納され、投餅も沢山まかれて、人出も昔にくらぶべきもないが店などが出て、のぼりが風にはためく音や、太鼓の響きは、なんとも気分の良いものである。

神社のすぐ南側台地の城山には、町指定史跡「明徳寺城跡」[34]があり、室町末期に、後関氏の築城といわれ、もと天神山城と呼んだが、明徳元（一三九〇）年六月十五日、城山の麓に明徳寺が創建され明徳寺城と呼ばれるようになった。そして明徳寺には、県指定重要文化財「明徳寺聖観音」[35]が本尊様として祭られており、また、すぐ近くに横道十四番の観音堂の跡があり、沢浦の穴観音と呼ばれ、穴の中に大小の観音像二十体近くが祭られている。

横道観音十四番御詠歌、

石　尊　山（八東郡）

罪清えて　障りはあらじ
沢浦の
深き誓いを
頼む身なれば

また、寺の境内や奥の山からは、緑色の岩盤の層が露出しており、明徳寺石として、昭和初期から最近まで切り出されたが、欠け易い欠点があり、今は石切場の跡が見られるだけである。

明徳寺の北、はるかに石尊山が見える。その中腹六〇〇メートル程の標高の所に竜紋岩からなる五〇メートルに及ぶ巨岩がいくつかあり、その中に四つの自然に出来た洞窟（岩除）があって、そこに八東郡神社の拝殿がある。江戸時代沼田城主真田五代伊賀守はこの小字に社領を寄進したと言われているが、ここから人骨、穿孔された人歯、動物の骨、貝鋼片、石帯片、碧玉、管玉、石器、縄文弥生の土器片等が出土し、町指定史跡「八東郡岩除遺跡」となっている。[43] 八東郡の左手前には、曹洞宗三峯山玉泉寺がある。[44] 本尊は釈迦如来に文珠、普賢両菩薩を祭り、室町時代、文明二（一四七〇）年の開基となり、五〇〇年の寺歴を有す。町指定重要文化財「棚渕虚冲軒練手の石」がある。神道一心流の開祖、棚渕弥兵衛宣根は虚冲軒と号した。延享四（一七四七）年に後閑に生れた。若いとき、この石を力石として修業にはげんだものであろう。

禁　裳　碑

山門の所には、町指定重要文化財「禁裳碑」があり、禁裳術売買と刻られている。

さらに左手に下った所に、町指定史跡「後閑館跡」がある。[45] 後閑次郎祐房の構築と言われ、館の広さは南、東面共に六〇メートル程の方形で、二メートル位の土塁によって仕切られていたが、今は西側北寄の部分が残されており一か所に虎口が切られ、すぐ近くの内子山砦の物見台に通じている。

道は清水新道を進む。右手に後閑駅からの歩道が来ているが、そのかたわらに、寛政三（一七九一）年の馬頭観音が建てられている。[46] この歩道は、町内で一番利用され、利根商業高校の生徒が日曜日や休日以外には、朝夕通うのだが、足もとにあるこの石仏、何人の人達の目にとまる事やら、おそらく知らない人が多い事と思う。

馬頭観音

さてここで、再び一級国道一七号線を横断する。月夜野橋のたもとである。

ここには古い頃、後閑橋が架けられていた事が、後閑区有文書の中に出てくる。天正八（一五八〇）年北条氏邦が小川城攻略に渡ったとも言われ、また、武田の代将真田昌幸が明徳寺城攻略に渡ったのも後閑橋だと言う。しかし、明暦三（一六五七）年流出したと伝えられ以降、徒渉の渡し場に真田藩の藩船が置かれた。

嘉永七（一八五四）年十一月に架橋願いが出されているが、江戸時代には実現

しなかった。明治五年に工事が始められて、翌六年に完成して、月夜野橋と命名された。その後何回か、掛替えられて現在に至る。

橋の対岸に、町のシンボルとも言われる、義人杉木茂左衛門を祭る千日堂がある。[47]

沼田城主真田伊賀守信澄の悪政に義憤を感じ、沼田領勢多郡、吾妻郡、利根郡一七七か村の代表として、一命を顧みず、須川村大法院昌月法印に訴状を浄書してもらい、徳川五代将軍綱吉に、法度である直訴（越訴）に及び、伊賀守を改易に追い込み、領民を救う。が茂左衛門は、天和二（一六八二）年十二月五日、利根川、竹の下河原で磔の刑に処せられる。赦免の知らせを持った急使が江戸から馬で飛ばしたが、二キロ程の所迄来て、わずかに間に合わなかった。

茂左衛門の徳をたたえて、千日の供養をし、春秋の彼岸仲日の例大祭には数万人の参詣者で賑わう。

時は流れて三百年、普段の日でも香華の絶える事がない。

この茂左衛門千日堂境内には、十基以上の石造物がある。

茂左衛門地蔵尊千日堂

芭蕉句碑

町指定重要文化財「芭蕉句碑」も、その一つである。

川上と、
この川下や
月の友

七十二歳文志書

また、町指定重要文化財「貞和の板碑」他多数を陳列した民俗資料館もあり、歩いて一〇分位の所には、町指定重要文化財「奥の院本堂」「貞享の水候」等もあって、楽しめる場所である。

2　真庭政所集落から後閑集落へ

No.	名称	年号	備考
23	南無阿弥陀仏	享保一五年	政所村
	双体道祖神	寛保　三年	大乗妙典日本遍国供養
	知恵輪観音塔	文政　二年	信州伊奈郡八□村石工登内文蔵親誠
24	天王宮	嘉永　四年	特に大きい
25	馬頭観世音菩薩	寛政　九年	真庭村政所村鎮守
26	熊野神社		真庭村政所村
	灯　篭	正徳　四年	
	二十三夜待供養	寛保　三年	
27	稲荷宮	安政　四年	世話人両色絵若者
	層　塔	明暦　三年	一対日月華鳥猿の浮彫
28	松井市兵衛刑場跡		高さ五メートル
	宝篋印塔	宝永　六年	施主真庭村政所村
	水　神	明和　三年	
	普門品読誦供養	天保　一〇年	
29	道　標		三国他剝落
30	五輪塔		真庭氏本家墓
	宝篋印塔	天保一二年	浮彫墓石
31	龍谷寺十六羅漢像		町指定重要文化財
32	金山古墳群		県指定史跡
33	名胡桃城跡		

34	古　墳		
	石　仏		
	白衣自在観音菩薩		
	馬頭観音	安永　九年	他に馬頭仏（慶応三年）為真庭家先祖
	徒歩方葉歌碑	慶応　三年	
	小川島歌舞伎舞台	文政　二年	
	中村天満宮舞殿		
	琴刀平神社		
	小高神社獅子舞		
36	明徳寺城跡		町指定重要文化財
37	明徳寺聖観音		県指定重要文化財
38	沢浦穴観音		町指定重要文化財
39	八束穂岩除遺跡		町指定史跡
40	玉泉寺		穴の中観音像二〇体
41	櫛渕虚庵軒練手の石		町指定史跡
42	禁芸碑	文明二年開基	五百年の寺歴
43		宝暦一〇年	町指定重要文化財
44			菩同会法華書写供養塔当山十八世叟代　町指定重要文化財
45	後閑館跡		町指定史跡
	後閑次郎祐房嗣	永和　四年	当村増田氏宗族造
46	馬頭観音	寛政　三年	
47	義人杉木茂左衛門千日堂		
	芭蕉句碑		
	貞和の板碑	貞和　四年	七十二翁文志書、町指定重要文化財
	奉遠立五千日待供養塔	正徳　四年	町指定重要文化財（民俗資料館）
	奉遠立庚申塔供養五穀	宝永　五年	当町施主四十□人敬白
	就伎		町指定重要文化財
	果の院本堂		町指定重要文化財
	貞享の本帳		

三、後閑集落から川上集落へ

さて、道は国道を横断して、水上有料道路への道を北上、しばらくして道路から左にそれる。上越硝子クラタクラフト工場の前あたりから、田んぼの中や住宅の下になり、道形はまったくなし。道筋はそのまま進み、有料道路の道を横切り、硝子工場の終った所で、岩瀬に上る道と交差し、ここで後閑が終り、下牧地内に入る。

下牧と言えば、下牧人形芝居、県指定重要文化財「古馬牧人形」[48]がある。元禄（一六八八）の頃、土地の古老が伊勢参りの土産に、人形の頭を買って帰り、若衆に使わせたのが、人形芝居の始まりと言う。

道は有料道路の東側にあるが、すぐ横断して西に移る。給食センターの前から、左に入る。

ここからは、ほぼ二メートルちょっとの旧状をとどめた道がつづく。以前右側に鯉池があったが、今は住宅が建ち並んでいる。

左手の利根川の先に、大峰山が美しく見える。県指定天然記念物「大峯山浮島及び湿原植物」[49]と同じく県指定天然記念物「大峯山モリアオガエル繁殖地」[50]などがある。

古馬牧人形芝居の頭

進むにつれ、落ちついた田舎の風景がうつり、気分が休まる。川岸に松の木が並び、車

も人も通らない。右手に石仏が並ぶ、と正面にも道祖神と馬頭観音を見る。[51]

この馬頭様は、馬頭が像で刻まれており、その下に観世音と文字で書いてあって面白い。

このあたり、まったく大きな家が建ち並んでいる。一〇〇メートル程そのまま進むと、セキがある。ここを左に入る。セキにはアヒルがグァグァと鳴いていた。

変った馬頭さま

下牧地内の旧状をとどめた道

政所井土上、石工が一日に石を二こたたき積んだ石垣

鍛冶屋焼入れの道具

政所井土上用水が見えて来た。用水と、いまのセキの分水の処に、庚申塔など石造物が並んでいる。[52]

昔、鍛冶屋をしていたと云う家の前には、ポツンと石の水入れが、すてられた様においてあった。さらに道は、政所井戸上用水にそってつづく。

政所井土上用水は、承応二（一六五三）年真田氏によって作られ、約六キロ、水田約五〇ヘクタールを灌漑する水路である。

ここで月夜野町、いや清水道の中で、昔をそのままに道の風情を残している所と言えばここであろう。

いかにも、さわやかな感じのする所である。清水新道（水上有料道路）と並行してはいるが、約三〇メートルばかり離れていて、村の人もほとんど通らず、町の人もここに古い道がある事も知らず、忘れ去られた、時のない道である。

そのまま道は、しばらく続く。右手には利根川の近くのためか、水よけ地蔵が祭られている。[53] 山手には、玉泉寺の末寺、常恩院が見える。[54] 堂内欄間の十六羅漢及び須弥壇の彫刻は見事である。

道が川に近付いたと思ったら、急に右に曲ると、ゆるい坂を上りながら、有料道路を横切ると、高橋阿伝の家がある。[55] 明治の始め、稀なる美貌と数奇な運命の波にもまれて、三十才にならずして、はかなくも刑場の露と消えたおでんは、ここの産である。道はそのまま坂を上る。道の両側に歌碑群が建っている。賀松園桃孝などの歌碑が十数基ある。今はこのまま坂を上るのだが、鉄道の截かれる以前は左手に入り、石段を八〇段程上り、牧野神社に入る。この神社は一之宮貫前神社のように、一度鳥居（両部鳥居があったが今はない）のある高い所に上り、また、少し下ると社前に出るようになっていたと言うが、今はその面影やたたずまいは見られない。

町指定重要文化財「牧野神社棟札」が保存されている。[56] 奉創立長野大神宮、

寛平元（八八九）年四月吉日、願主大宅真久とある。

ここには立派な石造物群があり、しばし歩をやすめる。道は北に向かう。町指定重要文化財「芭蕉句碑」[58]が右手に見えて来た。

道ばたの
むくげは　馬に
喰はれけり

道は、さらに続きくねくね曲りながら、宮地の大観音の前に出る。[59]高い部分は古墳であって、その上に、石造のまったく大きな観音様が、北向きに祭られている。道祖神、馬頭観音も並んでいる。そこから鳥原を抜ける。

平らで広い土地で古い頃の牧場の中心地である。次の集落が勝浜、そのすぐ手前に屋敷跡や、井戸わく等がいくつか見える所がある。いつの頃か村がなくなってしまったのだろう。

道は勝浜で山手の方、むじな峠をへて、鳥峠（ちょうとう）を越えて戸倉の集落に出る山路と、利根川のふちを通る道とがある。今は山路は一般の通行は無理、川手の道を行く。

ここも写真の如く、美しい道である。土地の者は、殿様街道と呼ぶ。この呼称は毎秋の検見や、小児養育役所の役人が出張しているので、この名がついたのだと思われる。

集落には、いくつかの石造物と小さな勝浜の板碑が一枚畑の隅に建っていた。[60]急な山坂に、家がへばりつく様に、点在する村である。

坂を下ると、町指定重要文化財「子持神社本殿」が見える。[61]大変めずらしい八棟造りと言う屋根が目をひく。

芭蕉句碑―下牧―

勝沢集落　殿様街道

八棟造りの屋根を持つ子持神社本殿

絵師　登坂文岳の家（上牧木之根）

上牧、木之根不動様

ここには土地の絵師、登坂文岳の書いた絵馬が奉懸されている。道は有料道路に出る。古い墳はもっと川の方にあったようだ。そしてここは渡しのあった所である。対岸には戦国末期の刀工「上野国憲重」の鍛刀跡があり、その一振は県指定重要文化財となっている。

そして、視野の中には、町指定史跡「小川城跡」[64]「石倉城跡」[65]などがある。

道はしばらくして右に曲がり、木之根不動堂の所に出る。[66]

ここは山手の道が戸倉を通り、ここで交わる所である。戸倉にも戸谷にも若干石造物の良いのがある。[67]また、縄文遺跡、住居跡等がある。

この堂前にも、石造物群が沢山ある。道はここから北に向かい、四ケ村用水に沿って行く。[68]

四ケ村用水は、字の如く上牧、下牧、後閑、師の四村の水田一五〇ヘクタール余りを潤し伊賀堰りと呼ばれ、今でも使われている。この用水は、慶安三（一六五〇）年真田四代沼田城主大内記信政によって起され、承応元（一六五二）年完成したものである。

さて、道は用水から左に下り、有料道路を横切り、水田の中の道を進む。上牧駅前には、幕末の刀工、「高柳藤原国武」の末裔が、かじやをやっている。三品家の鑑札と、当人作の笹穂槍が保存されている。刃渡り十二、六センチ、銘藤原国武作、元治元年二月吉日、とあり、直刃柾目流れである。

駅の東側には、道木堂、万法院があり、地蔵尊が祭られている。[69]金子右門近慶作之と銘があると言う。石造物も沢山あり、夕日に映えて美しい。

道は利根川に沿って北上、上牧温泉の辰巳館の裏を通り、さらに、道なき所を北へ進む。町には辰巳館と上牧荘、それに奈女沢温泉の月光館、その他三軒程の湯宿があり、行楽客で賑わっている。また月夜野焼も、大変人気が高い。右手に道木の熊野宮があり、[70]石殿の大変大きなものが見える。石殿の屋根は入母屋の妻入りの形になっている。文字があり、年号を見ると、寛永十二（一六三五）年とあり、かなり古いものと言える。

右手の高台からの谷川岳の景色は絶品、清水峠越往還の道筋はどの辺りを通るのかと、考えながら見る。

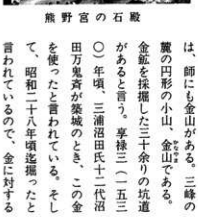
さて、道は水田の中を進み、右に曲り坂を上ると、水上有料道路に入り、五〇メートル程で左に折れる。角の所に、天王様の石宮とお堂が見える。[72]奈女沢の集落である。

右手、山の中の奥、奈女沢天沼には、信玄坑と呼ばれる古い坑跡がある。[73]武田信玄が掘らせた金山である。今でも坑口がいくつか残っているが、まだしっかりしていて中に入れるものもある。昭和三十五年頃迄、掘っていたと言うから、武田からと言えば、四百年以上になるわけである。月夜野町には、師にも金山がある。三峰の籠の円形の小山、金山である。

金鉱を採掘した三十余りの坑道があると言う。享禄三（一五三〇）年頃、三浦沼田氏十二代沼田万鬼斉が桑城のとき、この金を使ったと言われている。そして、昭和二十八年頃迄掘ったと言われているので、金に対する

三品家の鑑札
（杉板　高さ18.7cm）

道木堂万法院前の石仏


熊野宮の石殿

3　後閑集落から川上集落へ

No.	名称	年号	備考
48	古馬牧人形		県指定重要文化財
49	大峰山浮島及び湿原植物		県指定天然記念物
50	大峰山モリアオガエル繁殖地		県指定天然記念物
51	馬頭観音	嘉永　□年	
52	行者塔 庚申神 二十三夜供養塔	寛政一二年	
53	普門品供養	享和　元年	愛宕山秋葉山
54	政所井上上用水	承応二年完成	真田氏
	水よけ地蔵	享保一六年	
	奉納西国坂東秩父供養	宝暦　九年	同行七人
	馬頭仏	寛政　四年	光釧書印
55	二十一夜待供養塔		十六羅漢像彫刻
56	常恩院		
57	高橋阿伝家		
	牧野神社棟札	寛平　元年	奉創立長野大神宮　願主　大宅真久
	奉納庚申供養	宝暦　元年	町指定重要文化財

奈女沢集落

あこがれとか、魅力は、はてる事はないものと思われる。

奈女沢の集落から道は鉄道を越えて、水上の町に入る。

No.	名称	年号	備考
58	日月雲紋庚申	万延　元年	
59	日月雲紋大日供養塔	安政　五年	
	天地地祇碑	安政　七年	行者当村村上七左衛門
	芭蕉句碑		町指定重要文化財
	大観音巻読誦普門品供養塔	寛政　八年	当邑沢上
	奉納秩父坂東西国供養塔		
60	勝浜の板碑		
61	子持神社本殿	寛永　一〇年 造立	
62	刀工上野国憲重		
63	梨木平敷石住居跡		
64	小川城跡		
65	石倉城跡		
66	木之根不動堂		
	庵摩訶経塔		
	大日供養	天明　元年	
67	地蔵尊石番供養	寛政　一〇年	
	大乗妙典千部供養塔	寛政　一〇年	
	観音講供養	文化　一一年	
	奉造立勢至菩薩廿三夜待供養	文化　八年	
68	双体道祖神	明和　九年	
	宝篋印塔	安永　五年	
69	四ケ村用水		伊賀掘り慶安三年完成
	槍銘藤原国武作	元治　元年	三品家鑑札あり
70	万法院地蔵尊		
	青面金剛	元録一六年	金子右門近慶作
	奉納大乗□典六十六部供養	安永　六年	
	宝篋印塔	天文　五年	
	地蔵	寛保　□年	奉造立紫昌
	庚申供養	宝暦　九年	
	熊野の石殿	寛永　一二年	
71	日月雲紋庚申	安政　五年	
	天地地祇碑	安政　七年	行者当村村上七左衛門
	芭蕉句碑		町指定重要文化財
	大観音巻読誦普門品供養塔	寛政　八年	当邑沢上
	奉納秩父坂東西国供養塔		
	勝浜の板碑		
	子持神社本殿	寛永　一〇年 造立	
	刀工上野国憲重		
	梨木平敷石住居跡		
	小川城跡		
	石倉城跡		
	木之根不動堂		
	庵摩訶経塔		
	大日供養	天明　元年	
	地蔵尊石番供養	寛政　一〇年	
	大乗妙典千部供養塔	寛政　一〇年	
	観音講供養	文化　一一年	
	奉造立勢至菩薩廿三夜待供養	文化　八年	
	双体道祖神	明和　九年	
	宝篋印塔	安永　五年	
	四ケ村用水		伊賀掘り慶安三年完成
	槍銘藤原国武作	元治　元年	三品家鑑札あり
	万法院地蔵尊		
	青面金剛	元録一六年	金子右門近慶作
	奉納大乗□典六十六部供養	安永　六年	
	宝篋印塔	天文　五年	
	地蔵	寛保　□年	奉造立紫昌
	庚申供養	宝暦　九年	
	熊野の石殿	寛永　一二年	

四、川上集落から清水峠へ

月夜野町の北端奈女沢から水上町へ入る。河原に沿ってきた道は水上町へ入るとすぐに鉄道線路、国道二九一号線を横切って、一旦山寄りにコースをとったあと再び有料道路、鉄道線路を横断して利根川の河川敷を銚子橋の方へ向かう。有料道路へ出る少し手前の路傍の桑の木の根方に、上杉憲政の「馬つなぎ石」がある。[75] 戦国時代、関東管領上杉憲政が北条氏に攻めこまれ、長尾景虎に救援を依頼するために越後へ落ちのびたが、その途次水上町付近を通過した折、高日向で休憩されたがその時馬を繋いだといわれる石で「竭石」と呼ばれている。又、その近くには巡国供養塔、十六夜待供養塔、道祖神、庚申塔、馬頭観音、地蔵などの石仏、石塔が整然と横に一列になって並んでいる。[76]

水上町高日向　上杉憲政の「馬つなぎ石」

水上町小日向　菅原神社

高日向から道は利根川をはさんで東側と西側に分かれるが、清水峠越往還は西側の道を通ったものと思われる。東側の道は、高日向、小日向、鹿野沢の集落を通ってその先で清水越往還と合流する。この道は明治十八年開通の清水越新道として拡幅、整備されたが、それにつれて小日向の集落も宿場的な発展を遂げ、栄えた時期もあったようである。この近辺を歩いてみると家並のたたずまいや、山裾を屈曲しながら走る道形に、心なしか往時の雰囲気が伝わってくるような感じがする。また、この小日向において江戸時代、砥石の原石が採掘され、「沼田砥」と称して江戸を中心に広く販売されて、品質の良い中砥として好評を得ていた。

小日向の集落の北方、道路に面した左側の崖の上に菅原神社がある。[78] 鳥居をくぐり、勾配の急な石段を上っていくと社殿があり、その西側は利根川に臨む断崖になっている。ここからは水上の温泉街とその脇を流れる利根川の峡谷とが一望のもとに見渡せる絶景の場所である。祭神は菅原道真である。

小日向の北のはずれの民家の庭にある小さな人工池に県指定の天然記念物であるモリアオガエルが棲息している。[79] 春から初夏にかけて池に張り出した木の枝に産卵をするが、このように人家の多い所に棲むのは珍しいことである。

清水峠越往還は、高日向の南から西側に進路をとって、有料道路と鉄道線路を横切り、利根川の河原へと進み銚子橋に至る。真田伊賀守時代、利根川すじの橋としては沼田の南の戸鹿野橋から、北はここ水上の銚子橋まで橋は架けられなかった。その間は徒渉や渡し船で対岸に渡っていた。

銚子橋のある所は山襞深く浸食された峡谷で、秋の紅葉が利根川のせせらぎに映ずる様とあいまってその峡谷美は「諏訪峡」という名前で水上町の名所

の一つに数えられている。江戸時代の銚子橋は長さ二五間、幅二間の恥橋で、付近一一か村が組合村となって、十年目毎に架け替え、維持、管理にあたった。そして、伊賀守が冨士浅間神社を再興するに及んで谷川橋（現、かえで橋付近）と共に参拝道における重要な橋梁となるに至った。

銚子橋の左手、少し高みの台地を上った所に小仁田の集落がある。その小仁田の集落の南ではずれに大峯神社がある。[78] 文武天皇の大宝元（七〇一）年に勧請し、その後、後村上天皇の正平五（一三五〇）年に社殿を造営したという。以来幾度か改替されてきたが、社号は古くは開闢の年号を用いて大宝宮とも言った。祭神は日本武尊のほかに三柱が合祭されている。本殿の彫刻はまことにすばらしく、その清麗優美な結構は利根郡の神社の中でも屈指のものであると言われている。利根川上流一五か村の総鎮守として崇敬されてきたこの社の境内は、杉やモミの大木におおわれて森閑として静まりかえっている。

銚子橋をわたってほぼ国道二九一号線沿いに行くと、国道が左手に急カーブする手前、川上の集落へ通ずる道に入ると、その先きに諏訪神社がある。[79] その間の道は舗装されていない土の道で、両側に雑木林が迫ってきたりして、昔の面影をとどめている。

諏訪神社の前を右に折れると、わずかの距離であるが、旧道は畑の中を通って、再び国道へ出る手前で熊笹の藪におおわれて、前へ進むのに困難を感ずる。道形も笹藪におおわれてわずかしか痕跡を認めることができない。その熊笹をかき分け行くと国道に出るが、車道は崖下約一・五メートルの所を走っている。国道を横切ると利根川の河原へ出るが、今は築堤されて断崖になっており、とても河原へは下りることができない。河原を通った道は再び山すそへと上ってきて国道を横断すると一気に山道にかかる。このあたりの山道は非常に変化に富んでいる。山あいの細い道を歩きながら、右手に広い利根川の河原を眺むことができ、またその先きには水上の温泉街を手にとるように眺めることができる。

山道を行くとやがて曹洞宗宝珠山建明寺の前へ出る。[80] 立派な山門と、その山門の前の参道には亭々とした杉並木がそびえ立って、薄暗くもどっしりと落ちついた雰囲気を漂わせている。建明寺は関東管領で平井城の城主上杉憲政が北条氏に迫われて、越後の長尾景虎をたよって落ちのびる際に、同行した秀翁竜樹という僧が天文二十（一五五一）年栗沢に建立した小庵が、その発祥であるとされている。その後、現在地に移されて月夜野の玉泉寺の末寺となっている。

建明寺を過ぎると山道は急な下り坂となって湯原の集落へ入っていき、再び国道へと出るが、旧道はそれを横切って国道の東側をほぼ並行して進むことになる。そして、およそ七五〇メートル位行くとまた国道と交差してかえで橋へ出る。その途中に水上町の郷土資料館があり、[81] 川場村より旧戸部家の住宅も移築されている。水上町郷土資料館は水上町の歴史や民俗に関する

水上町小日向　普原神社境内より見た水上の温泉街

水上中学校奥の旧道

標本、実物、文献、写真等の資料が収集、保管、展示されているが、資料の豊富さに町当局の熱意の程がうかがわれる。

旧戸部家の住宅は、川場村立岩にあった戸部家の住宅を水上町が譲りうけ移築、復元したもので国指定の重要文化財になっている。十八世紀初頭の寄棟造カヤぶきの農家で、軒が低く柱の多い、開口部の少ない古い形式を残している。

水上町地内を通るもう一本の旧道が、湯原の集落を出て、左手水上中学に通ずる坂道を上っていった所にあったという説を付記しておく。この道は水上中学の脇を通って、谷川の沢に面した崖端を見え隠れに、山裾に沿って谷の奥へ入っていく。中学校からおよそ四〇〇メートル位行った所で、道は谷川の河原へ下っていく。そこで橋を渡り、対岸の谷川温泉に通ずる道に出て、水上町役場の少し手前の国道と交差する所まで下ってくる。利根川が増水、氾濫して、川端の道が通行不能に陥った時に或いはこの山裾を縫って走る道を通ったのかもしれない。

この山あいの道で水上中学へ至る途中の左手の高台に成田山分院水上寺がある。[82] 成田山新勝寺の不動明王を勧請して、昭和三十六年に新たに宗教法人水上寺として寺格が確立されたものである。広い境内には樹齢数百年の老杉、古松が点在している中に、まだ木の香も新しい本堂や庫裡、その他の伽藍が整然と配置されて、生気溢れた新興の意気が感じられる。

楓橋は現在、国道と一体化しているが、その昔はすぐ上手に刎橋が架けられており、谷川橋と称した。そのたもとに歌人川田順の歌碑が建っている。この谷川橋は、前述の銚子橋と同様に、富士浅間神社の参道にある橋として重要性を帯びており、一一か村の組合によってほぼ十年毎に普請がなされた。

往時は、かえで橋から谷川温泉へと道が通じていたのだが、現在は水上町役場の手前の道から入っていかねばならない。その道を谷川温泉の方へ、およそ五〇〇メートル程上っていくと右手に上杉憲政の井戸跡がある。[83] 道端の杉木立の中に雑草におおわれてある。井戸枠に使われていたと思われる苔むした大きな石も、枠組が崩れてほとんど原形をとどめていない状態である。憲政の井戸跡から更に五〇〇メートル位行くと、左手の道路に面して、道祖神や青面金剛などの石仏群がある。[84] それを横に見ながら進むと谷川温泉に至る。

水上町谷川　富士浅間神社

水上町大穴　石　仏　群

谷川温泉は谷川橋の上流約一・五キロの所にあり、温泉街の奥まった北のはずれに、富士浅間神社がある。康暦二（一三八〇）年創建で、木花開耶姫命外六柱を祭神にしている。又、御本体は谷川岳一ノ倉の岩窟にあった熊仏で、永禄八（一五六五）年の銘があり、文化財としても貴重である。境内には、大正七年谷川温泉に遊んだ若山牧水の歌碑が建てられ、

「わがゆくは　山の涯なるひとつ路
　　冬日ひかりて　氷りたる路」

という歌が刻されている。

かえで橋から旧道は国道二九一号線上を、利根川に沿って並行に進み、利根川が右に大きく蛇行し終えたあたりから、国道の下の河原伝いの道に入っていく。河原の道は雑木におおわれていたりして、ほとんど人の通行もなく細々とした道は、わずかに昔の道形をとどめているに過ぎない。

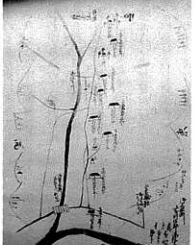
河原伝いの道は、再び国道に出ると、すぐにホテル「奥利根館」の前から急勾配の坂を上って大穴の集落へと入っていく。

大穴の集落は利根川に臨む段丘上にあり、その台地の上をほぼ一直線に旧道が走っている。集落の入口近くに、双体道祖神、地蔵、庚申塔、多宝塔等の石仏が並んでいる。[85] 大穴は近くに大穴スキー場があるため、冬季に沢山のスキーヤーが訪れる。その宿泊施設としての民宿が、旧道の両側に軒をつらねている。

また、旧道の西側を少し山の手に入った所に、縄文時代の住居跡が発掘、保存されている。この住居跡は二か所あって、昭和十年と十二年にそれぞれ発掘されており、現在は国の史跡として覆舎が建てられて保存されている。[86][87] 二か所の住居跡は、何れも縄文後期の約三五〇〇～四〇〇〇年前のものであるといわれ、川原石を床に敷きつめた竪穴式の半穴居、敷石住居跡である。しかも二基とも中央に炉をつくった楕円形をした住居跡で、土器、石斧、石皿、石鏃なども一緒に発見されている。

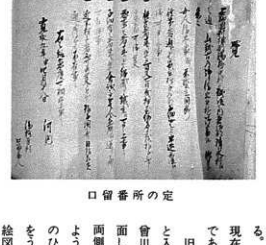
この大穴付近の地形は、すぐ前に利根川を臨む台地で、二つの沢が流れて水の便がよく、しかも東南に面して日当りもよいので、古代人の狩猟・漁労の場所としては恵まれた環境にあり、生活の場としてふさわしい所であったと思われる。

大穴の集落を抜けて、上越線をまたぐ跨線橋を渡ってしばらく行くと、道はやがて藤原道と分岐し、利根川もここで利根本流と湯檜曾川に分流する。旧道は北上して湯檜曾の温泉街へと入っていくが、ここで右に折れて藤原道をおよそ一キロ位行くと綱子の集落に入る手前に県指定史跡の宝篋印塔がある。藤原守泰が大楫郷となり、数人の講中を結んで永和二（一三七六）年に建立したもので、宝篋印塔に南無阿弥陀仏と名号があるのは県内でこの一基のみである。しかし碑面の文字は摩耗して現在ほとんど判読が不可能な状態である。



明治３年　湯檜曾村絵図

旧道はやがて湯檜曾の温泉街へと入っていく。利根川の支流湯檜曾川を渡ると、川に沿った道路に面して旅館が建ち並んでいるが、両側には峨峨たる山がおしつつむようにして迫ってきており、山峡のひっそりとした温泉という印象をうける。明治三年の湯檜曾村の絵図を見ると、湯檜曾川にかかった橋は刎橋であり、しかも道路に沿って点在する家はわずか八軒しかなかったことがわかる。



口留番所の定

湯檜曾は清水越往還の最奥の集落であり、江戸時代には口留番所が置かれて関所的な役割を果たしていた。しかし、番所そのものは関所と違い、交通を停止するためのもので、口留番所を配してその条目を堅く守らせ、近隣の者

のやむを得ない用事のための交通を認める以外、すべて交通を止めた。

番所開始の時期ははっきりとわからないが、寛永年間には既に設置されていたものと思われ、つぎの記録が残されている。

覚

上野国利根郡湯檜曾村ゟ越後之内魚沼郡清水村江之通り山越古道御停止被遊御番被仰付候条々

一、女人停止之事　附り前髪立同断

一、往来之者通りニ者留置様子相尋子細無之候ハバ早速前後江帰可申候事

一、怪敷者来り候者三日又七日茂押置何方ゟ茂様子不申来者可帰事

一、悪事之者来り候ハバ縄掛ケ城主江可申上事

一、子細有之者来り候者良議之上其人之在所江送り届ケ可相渡事

一、近所村々之者不叶用事ニ付而ハ様子聞届ケ日限相定通シ候得而も不苦事

右之趣急度可相守事

寛永九年申四月十八日　　河内

湯檜曾村

口留番人

番所は湯檜曾阿部家（本家旅館）が代々仰せつかって、明治元年まで続いたが、江戸時代には清水峠越往還は、口留番所があったり、急峻で険阻な山道であったことから、ほとんど人馬の通行はなかったものと思われる。

湯檜曾はじめ、"湯のひえ村。と呼ばれた。湯檜曾の開発については「湯檜曾村根本記」等に記されているが、あくまで伝説的伝承しか過ぎない。それによれば前九年の役で、それまで奥州に覇を唱えていた安倍貞任、宗任の兄弟が、源頼義、義家父子によって滅ぼされたが、その一族残党が尾瀬に落ちび尾瀬城を築いたといわれる。その子孫で尾瀬判官阿部貞道（通）の三男阿部孫八郎貞次が室町時代の中期正長、永享の頃湯檜たつ谷間、湯檜曾に住みついたという。これが現在の湯檜曾の阿部一族の源流であるという。阿部本家旅館の少し先の右手に墓所があり、その奥に三基の宝篋印塔型の墓が並んで建っている。[88] 阿倍貞任と宗任とその父の頼時のもので、阿部氏の祖先として阿部氏によって祭られている。

水上町湯檜曾　阿倍貞任宗任頼時の墓

安倍貞任の墓から少し先へ行くと左手に薬師堂がある。[89] 昭和九年に現在地に新築されたもので、由緒は不詳である。

薬師堂から更に北へ少し進むと、湯檜曾の温泉街のはずれの右手に朝日神社がある。[90] 祭神は建御名方命と大山祇命とあるが、沿革については詳しいことはわからない。境内には「カッパ柳」と称する柳の老樹があり、大きな幹が地を這っている様は変わっていておもしろい。

明治18年開削の清水越新道の石垣

朝日神社の所から道は二手に分かれる。左手は国道二九一号線の新道であるが、旧道はは湯檜曾川に沿って走っているが、およそ二キロ近く行ったあたりから旧道は再び新道と分かれて、山裾のゆるやかな斜面を通る。しかし、新道はほぼ一キロ程続って走り、再び新道に合流する。江戸時代の通行も少なかったと思われるし、清水越新道が建設されに及ん

で、ほとんど通る人とてなく、現在は道形が消滅して判然としない。

山の斜面を通ってきた旧道は、マチガ沢のあたりから湯檜曾川の河原伝いに行く。このあたりからは草むらにおおわれながらも往時の面影をしのばせる古い道が細々と続いている。この河原伝いの道からは望見できないが、左手にはマチガ沢や一の倉沢といった太古の氷河の痕跡をとどめる谷川の急峻な岩壁が屏風のように屹立している。そしてその尾根の裾や沢の底を縫うようにして、清水越の新道が通っているが、マチガ沢に至る迄の間に清水越新道が建設された当時の石垣がところどころに残っている。

旧道はやがて武能沢や白樺沢の九十九折の道を経て、清水峠に至り、越後の国へと入っていく。

この清水峠越えは、戦国時代には直越（ナカゴエ）（上杉記）、馬峠（新編会津風土記）の名があって越後と上洲の間をかなりの往来があったものと推測される。それは上杉謙信が関東進出の一つの拠点とした沼田への最短コースでもあり、戦略的な意味からも重要視されていたものと思われる。しかし、上杉謙信が清水峠を通ったという確証はないが、天正六年に謙信が没すると、北条氏より養子に入った景虎と謙信の甥である景勝との間に、家督争いが起こり、景虎の実家北条氏が応援のために、この峠を越えて越後へ出兵したことが上杉記に記されている。

同書にはまた、天正十年に沼田城主藤田能登守信吉が北条氏との戦いに敗れて清水峠を越えたことが記されている。

このように戦国時代以前のかなり古い時代には、往来も頻繁であったと思われるが、江戸時代になると口留番所が設置されて、諸人の通行や物資の搬送が禁止されるに及んで、ほとんどその往来は途絶えてしまい、湯檜曾・清水峠間は往還としての機能を失い、道形もいつしか消滅して、わずかに植（ウエ）道が尾根伝いや沢伝いに細々といった状態ではなかったであろうか。

4　川上集落から清水峠へ

No.	名称	年号	備考
74	馬つなぎ石		上杉恵政　竭石
75	廻国供養塔	文政　五年	
76	菅原神社	文化　七年	
77	十六夜待供養塔		
78	モリアオガエル生息地		県指定天然記念物
79	大峯神社		
80	諏訪神社		
81	建明寺		
82	水上町郷土資料館		
83	旧戸部家住宅		国指定重要文化財
84	成田山分院水上寺		
	上杉恵政の井戸跡		
	道祖神		
	青面金剛		
85	双体道祖神		
	庚申塔	安政　七年	
86	縄文時代住居跡		国指定史跡
87	阿倍真任・宗任の墓		
88	薬師堂		
89	朝日神社		
90	カッパ柳		

あとがき

本年度の歴史の道調査は五街道という数多い街道調査であり、しかし調査員の人数も限られた中での調査であった。そのために、前回までの調査以上に多くの負担をかけることになってしまった。それにもかかわらず、各街道について道の確定、道の現状、文化財の分布状況等適確に把握でき、初期の目的を達成することができた。

今回の調査においても、近代化の波の速さに驚かされることが度々であった。年度当初の調査時と年度終了の際での写真を比較すると、わずか一年足らずの期間に、同じ場所でありながら全く異なる風景が各街道で写し出された。このことから歴史の道調査が時機を得た調査であるとともに、調査の重要性をも再認識させられた。

また、本年度調査対象街道は、県内でも脇街道的な存在であり、そのためこれまで未調査の部分が多い街道であった。今回の調査によって、これらの街道の道が確定できたことや、一連の文化財調査ができたことは、今後の街道研究上、大きな意義をもつものと思われる。

ここに本調査によって明確になった点をあげると、川と水田の低湿地の中に築かれた堤防上をくねくね曲がりながら、三メートル幅の旧道がはるか遠くまで続く吉河往還。これは県内の他街道では見ることのできない光景である。

また、桐生の絹織物が江戸や上方へ搬出された道であった古戸・桐生道。新道と旧道が縄をなうように残されており、この旧道の一宿である道の中央に堀割を残す丸山宿は印象的であった。

そして、中世には既に相当利用されていたが、江戸時代には口留番所が置かれ、ほとんど通行禁止となりながら、再三にわたり開削願いが提出され、明治初年ようやく開通した時に築かれた峠付近に残る石垣。あるいは、佐渡奉行街道の中世から近世にかけての通路の変遷や、中山道から玉村宿に至る数条の道筋。また、民家や水路に昔の宿場の面影をとどめる八木原、大久保、総社宿の景観。これらは貴重な街道資料である。

また、本調査では、最も長い距離をもつ下仁田道。下仁田地方の特産である砥沢砥、こんにゃく、ねぎ、和紙の搬出路として重要視されていた。現在でも旧道沿いの宿場町であった藤岡、吉井、富岡、下仁田、砥沢等には土蔵造りの商家あるいは旅籠屋風の家々が往時の面影をとどめている。だが、国道十八号のバイパス的役割はいまでも変わらず、自動車の交通量は年々増加し、今後の保存対策が待たれる。

特に、この下仁田道の枝ではあるが、甘楽町小幡の城下町としての道路中央を流れる堀割及び家並、陣屋内の石垣の続く道筋は保存状態が極めて良好であることが確認された。これは本年度調査の大きな成果といえよう。

これらの成果の陰には幾多の労苦や協力があった。これまで不明であった旧道の道筋について、地元教育委員会の方々地元の方々に日曜日にもかかわらず、炎天下の中を一日中案内していただいたり、種々お世話になった。

また、調査も必ずしも順調に進んだわけではなかった。樹木や光線の関係で冬季にと予定した写真撮影は、今冬まれにみる大雪のため、石仏等雪下に埋れ、雪どけまで撮影困難となったこともあった。あるいは、現在廃道になった峠道を数時間かけてようやく上ったところ霧のため、まわりがかすんで写真撮影できなかった等、数々の障害もみられた。

だが、調査員の方々の献身的な調査への参加により、課題を一つずつ克服し、ここに、本報告書を刊行することができた。協力いただいた方々に深謝する次第である。

この報告書が、今後の研究用資料として、さらに県民一般の街道探訪のハンドブックとして利用されれば幸いである。そして、調査本来の目的としての保存整備の基礎資料として、本調査で得られた資料をさらに詳細に分析し、十分検討していきたい。

（文化財保護課）

清 水 峠 越 往 還

昭和56年3月31日　初版発行
平成10年3月25日　改訂新版第1刷発行

発行　群 馬 県 教 育 委 員 会
〒371-8570　前橋市大手町一丁目1の1
TEL 027－223－1111

編集　群馬県教育委員会文化財保護課

印刷　有限会社　渋　沢　印　刷